秋は更け行く青葉山故園の姿いまいかに、
扶搖のあらし音を絶えて雄圖は夢か五城樓
桃李の盃の虧けしより三百年の春移り
山川の靈變らねど偉人の叫びまた聞かず。
波間の月の影冴ゆる秋は名に負ふ千松島
汀の寺に誰か今訪はん英主の不死の魂。

嗚呼三歌われ鄉を忍びぬ、
菊は荒園ににほふ瀼々の露。

四

扶桑の帝土千載の詩運は毎にうすかりき、
桂はな咲く西の空薫り比べんすべもなみ
さらでも脆き文の華今また秋に逢へるかな。
流水遠く春去りて谷に芝蘭の花摧け、
逸韻空にむなしくて九皐の鶴聲もなし、
月はすみだの秋の汐岸べのいほりいつまでか
蟄龍の怠りに風雲の氣の潜めるや。

嗚呼四歌我文を愁ひぬ、
風は簷端を拂ふ落葉の聲。

五

海若驕る秋九月、
浩々の水眺むれば思は遂に窮まらず。
波のあなたの邦いかに、
邦の眺めの數いくつ、
花は掩はん詩聖千古の墓
月は照さん雄都七丘の墟。
歴史の染むる長江の流れは廻る肥沃の土、
氷河を下す萬仞の峰は日に照る夏の雪
空しく夢に入りて今年の秋も更けにけり。

嗚呼五歌、われ西をしたひぬ、
烟は波上に横たふ長汀の夕

六

帝都の春に背き去りし友は山川今幾重、

夢も迷はん邊城の搖落の秋、歌ありや、
やめよ世を泣く慷慨の涙は酒と化しもせじ、
一飽足らば昭代の民とも笑へ肱まくら、
白露の咽ぶ寒蟬のわれも音になく夕まぐれ
たゞ一片の雲の色に遠く千里の思を寄せん。

嗚呼六歌、われ友を惜みぬ、
影は遙空に迷ふ雁字の群。

七

一輪の明月に二千里外も暗からじ
高樓簾を捲き去りて捲き去りて
關山のあなた異鄉の空を思はばや。
三十六の峰青き舊都の夏の夕まぐれ
一葉の舟嵐峽の綠の流水澄みて
情は傷みぬ千載風月の色
文は論じぬ一代才人の筆、
歡會夢は長からで秋はそゞろに更けてけり。

嗚呼七歌われむかしを戀ひぬ、
露は松篁に滿つ銀蟾の影。

八

輪影西に傾きて九天の露聲も無し、
人間わが世明月の光は常に圓からず、
三千の素娥瑤臺の舞曲は誰か耳にせん。
下界の絃歌いみじきはたゞ愁絕のしらべとか、
千載何の處にか理想は實に返るべき、
清夜の一歌たゞしばし秋のかほりを身にしめて
廣寒殿の風のねに蒼茫の思託さんか。

嗚呼八歌われ曲を了へぬ、
月は星河を渡る五更の曉。

（明治三十二年秋稿）

*「只把春風桃李盃」仙臺藩祖の句、公の蹟は松島の瑞巖寺にあり。

岸上の終焉

白布のとばり拂はせて
涙にくもる目に見やる
夕海原はしづかなり
ひとつ東の暮の星
そはたましひの行くさとか。

檜の松風さよなかに
叫ぶ恨はたがためぞ
ともしび暗し無象の世
見るかいまはの彼が目は
魂は半ばは過ぎ行きて。

あかつき清き八重の潮
汐路はるかに誘ふ風

雲を振へばさしのぼる
朝日の影ぞまどかなる
途を迎ふや逝く魂の。

やがて黄金の波湧きて
すなどりの歌いさましく
四方に漕ぎづる白帆舟
其舟遠し波のあなた
其魂遠し星のあなた。

白桃花

朝日影そふ淺みどり
谷間を過ぎて聲高く
清く流るゝ春の水
みなもとに戀と思とを

春もろともに浮べさりて
白桃の花いづち行く。

消えせぬ雪の色みせて
羊ひとむれ草飼へる
流に添へるみどりの野
まひるの空に夢みたる
牧の子笛を捨てゝ泣きて
白桃の花去るを見る。

百の柴舟しらほ舟
こむる紅夕霞
廣き流れのかた岸に
綠暮れゆく青柳
柳のもとに流れよりて
白桃の花また去らじ。

平和

海に黄金の波を湧かし
空に焰の雲を染めて
しづかに落ち行く夕日の姿
見よあめつちの胸の中
おほいなるもの彼にあり。

海にうつむく影をてらし
空にいみじき香を吐きて
岩かげにたつさゆりの姿
見よあめつちの胸のうち
うるはしきもの此にあり。

おほいなるもの光を射
うるはしきもの色を染めて

夕にみつる愛と平和
花は落ち行く日を慕ひ
日はたゝずむ花を戀ふ。

弔吉國樟堂

一

玉輦花を積みのせて霞に沈む春の神
別を遠く欄に凭り流にのぞみ眺むれば
空銷魂の色深き五城樓下の夕まぐれ、
幽蘭むなしく香をとめて白玉樓に君ありと
都のたより一封の涙の痕は夢ならず。

嗚呼白日の飛び行くを誰かは空に留め得ん、
夢を抱きて流水の光を慕ふ香をはやみ
散りてはかなき人生の花の行方や今いづこ、

緣は烟る一望の柳眠りて聲もなし、
雨を含める夕ぐれの雲も有情の色にして。

青山花を葬りて夕の森に月黑し、
無心の調か牧童の姿は見えぬ笛の音、
暮天の暗に包まるゝ愁の耳に聞きとれば
萬古靈きせぬ人の世の恨を述ぶる靈の歌
闇浮のよその泉より思を汲むに似たりけり。

二

昨日は齡二十六、けふは永劫の鄕の靈、
芳蘭花は脆うして運命の神ねたみあり、
一瞬の前君ありき、一瞬の後君あらず。

四歲都の假やどり、契りし道は淺からず、
斯文の光仰ぎ見るひとつの窓の影ふたつ
其影ふたつ人の世に今百年の別れとや。

夕日いろどる不忍の池の汀のさゞれ波
岸の逍遙袖かろく手を携へし日もむかし
隅田の堤夕ぐれの朧の月も散る花も。

思ひいためる雪の暮正月京をたちいでつ
忍が岡のあけぼのを、またも共にと契りけん
名殘の聲は春風に今もひゞけど人あらず。

昨日は山河九十餘里、今は生死の關幾重、
月の光の名にしおふ、千松島かけ波のへに
夏を忘れて歌はんと契りし人はいづこぞや。

都を思ふ今更に、母校の春の夕げしき、
朱門の垣は深綠、楊柳のかげ暗からむ、
ゆふべ花咲く電燈の光まばゆき*玻璃の窓
百千の卷集め來て探れる世*々のあとかたや
それはた空し學の海さ**きのあらしを傷みきを。

あゝあゝ細く光ある雙眸の星消え落ちて
かたみと殘る一塊の灰のみ鄉に今歸る、
火輪大地を馳けり行く東海の驛五十三、
生時のむかし仰ぎ見し希望のかげの富士の嶺
今は愁の雲閉ぢて神祕の色や深からん。

薩摩潟波のあなた、夏や來ぬらし古城の夕、
新なるその墓あらたなるその綠、
やがて照らん春を忍ぶ半輪弦月の光、
やがて聞かん血に叫ぶ千聲杜鵑の恨、
これより南樓夢常に短からむ、
これより西海波とこしへに咽ばむ。

かくて三尺の塚ひとつ(恨や凝りて石と立つ)
悽絶の面とゞむるはたゞ薄命の夢のあと、
是より日々に深み行く苔の綠に花も無く
泉臺暗くとこしへの夜にむくろはしづみ行く、

土にむくろは歸り行く――魂の行くへはいづこぞや。

四

こよひ淋しき雨のおとに愁は花の上ならず、
天地の染むる暗の幕にこもるは人の世々の思。

名も日ぐらしの里のゆふべ烟と消えしかたみの雲
しぐれてこゝに我宿に花を摧ける雨と降るか。

のきばのしづく夜半の窓に無韻のことば何の恨み
ともしびなれも心ありて忍ぶか過ぎし人のなごり

しづくの音も絶ゆるとき更に『靜寂』の語る思ひ、
ともしの光消ゆるのち更にさゝやく『暗』の言葉。

五

油は盡きぬ、――うばたまの暗の衣に纏はれて
花しぼみ行く床の間のあやなき薫身にしめつ
聞くは友呼ぶしめやかの遠き蛙の夜半の歌、

流轉の聲と姿とに波咽び行く廣瀬河。

天地に盡きぬ永劫の神祕のといき又こゝに
名殘の春を逐ひやりて愁ふ一陣夜半の風、
夢こそさわげ昨日まで色はにほひし花の窓、
その窓押せば暗深く今や『無限』の影ひとつ。

萬古の光動きなき北斗こよひは見えわかず
珠貫貝聯天狼の影やいづこの空のはて、
くしき力の蒔くところかなたに靈の邦ありや、
そこに不盡の春ゑみて石ことごとく歌ありや。

こゝに愁の花咲きて涙の谷に霧晴れじ、
こゝに移ろふ春の世に契短き塵ふたつ、
ひとつ跡なく消え失せて祕密のかどをくゞり行き、
ひとつ名殘の夢さめて永き思に沈み行く。

六

思よ始まる何の鄉、愁よ終る何の邦、
銀河のよそか星のよそか、空の海やむ雲のよそか。

千萬の生千萬の死、無限の起り無限の亡、
かくて流星の影も消えぬ、かくて三春の花も枯れぬ。

黃金の色見るめ眩む夕の雲もかくは褪めぬ、
白銀の光霜こほる夜半の月もかくは落ちぬ。

幾淵暗く億劫の生をひとしく奪ひ去る
死よ蒼白く電光の雲間かすかに馳くるごと
塵土の中に閃きて無常の眞理示す影。
哲學光薄くしてその神祕を穿ち得ず、
宗教迷多くしてその眞相を悟り得ず、
紅雲褪めて瑤臺の曲はわが世の風と荒れ、
彩虹絕えて天上の春は下界の花と散り、
劫灰絕えず吹き拂ふ世々のあらしに人の子は

たゞ力無く眼を擧けて天のあなたを夢むるよ。

愁よ、もだせ百年の齡短し人の春、
嘆よ眠れ煩惱の力かよわし墓の淵、
穹窿高く黃金の光を凝らす神の子の
またたく眼に閉ぢこもる不言の敎讀めずとも、
喜べるもの笑めるもの傷けるもの泣けるもの
すべての上に降り來る平和のめぐみあゝ思へ、
あらしよ雲よ散る花を誘ひて遠く行く水よ、
行きて大空暗の中に、去りて大海波の底に、
倦みし疲れし苦みし我世の夢の旅終へよ。

嗚呼夢深き人の子の悟りに遠き空のあなた、
有象の世界幾萬の群を包める空のあなた
誰かは拒む想像のするどき羽も猶たゆき
幽玄微妙圓滿の高き無象の邦無しと、
天の光を閉ぢかくすあだなる人の屋を出でよ、

靈の光を蓋ひ去る僧と俗との聲捨てよ、
人籟斷えて暗深き夜半の空に佇めば
天地しづかに靈籟の無絃の琴をかなでいで
人の心の底深く聲は囁く『たゞ信』と。

（明治三十三年暮春廣瀬河畔の假寓に於て）

＊彼が大學院に於ける專攻の學科は歴史なりき。
＊＊昨年彼が同郷の秀才某某、史學を修めしものまた幽冥の客となりぬ。

破船

半輪の月斜なる
地平線上雲黑く
形さながら世を笑ふ
惡魔の影に似たるかな、
破船のへりを洗ひさりて

波はむなしく立ちかへる。
波また寄せてまた洗ふ
折れし檣やれし舟
語るは何の悲劇ぞや、
叫喚の名殘たゞあらし、
月はすさまじしかばねの
殘れる數に青白う。

自然の力波の力
引きてしづめて海底に
ふたつの影を呑まんまで
しばしは命か猶殘る
あゝ破船の姿波のこなた
あゝ半輪の月波のあなた。

天上

光の大海、色のおほうみ
百千萬の日を集めて
熔すに似たる波のかたはら
神人碧玉の板とりて
焰の筆に鑄るは日記か
『あした――星雲さめぬ、
太陽の光ましぬ
地球の泡生れいでぬ
樂園の花さきそめぬ。

ゆふべ――星雲なほさめぬ、
太陽の光衰へぬ、
樂園の花うつろひぬ、
地球の泡は碎けぬ』と。

天上高し日ひと日、
下界幾億の歳か劫か。

無限

あらしの鞭に花泣きて
胡蝶の夢もさめはてつ
春のひかりはうつろへど
仰げば理想の空高く
『無限』は照りぬほゝゑみぬ。

人のつぼみのをさなごの
いまはの床に母は泣く
家の光は消え行けど
仰げば理想の空高く
『無限』は照りぬほゝゑみぬ。

尊き道の名によりて
罪なき血汐すゝられつ
教のひかりくもれども
仰げば理想の空高く
『無限』は照りぬほゝゑみぬ。

黑龍江上の悲劇

頃者、客の露領ブラコエチエ・スク府より歸り來るあり、就て同市の悲劇の眞相を問ふ。客愁然として語りて曰く、同市府近一對の岸は清人の屍累累として惡臭鼻を衝き啾々の鬼氣人を襲ひ慘憺としてうたた行人の腸を斷たしむ。八月二十日余等一行の武市に着してより滯留殆んど十餘日、其間アイグンの煙燼は遠く天に連りて尙未だ止まず、一脈の黑煙は濛々として遙かに大市邑の昔を想見せしむ。露曆六月一、二の兩日清兵武市を砲擊したりと稱する跡に就て見るに、僅か或民家の一端を損じたるに過ぎずして露人當時の騷擾却て怪訝にたへず、軍務知事グリブスキイ中將は武市清人の內應を慮り、同四日一隊の守備兵を同街に出して、清人を捕縛せしめ五千餘人の老若男女を狩りて黑龍沿岸に送り砲火と江流とを以て悉く之を燼せり、武市の清人五千、內潛伏遁竄命を全うせしもの僅に五六十人に過ぎず。

（明治三十三年九月十九日東京朝日新聞、同廿一日ヤヤパンタイムス等參照）

一

大江流れて四千露里水は長空の影ひろく、
雲烟迷ふシベリヤの南を遠く貫きて、
末韃靼の海に入る黑龍の流萬古の波
記せよ——西曆一千九百年、なんぢの水は墓なりき。

五千の生靈罪なくてここに幽冥の鬼となる、
其悽慘の恨みよりこの岸永く花なけむ、
千載これより大江の名、罪の記念に伴はん、
萬世これより大江の線、東亞の地圖に血を染めん。

犧牲は平和の清の民、賊は兇暴のコサック兵

その豺狼を狂はして群羊をかりしものやたぞ、
『露軍の中將グリブスキ　怒の波に名をのせて
四千里遠く大江の水よ四海に奔り行け。

あゝ、殘虐の將虎狼の兵、
千秋何の處にかよそになんぢの類を見ん、
上帝の怒盡くるまで、大江の流涸るゝまで
その罪惡をとこしへに萬邦の民よ、皆詛へ。

皇天の光亡びずば、歴史よなんぢの責思へ、
嗚呼鋼鐵の筆とりて正義の女神永劫の
おもてに既に彫めるを今戰慄の目に見ずや
『西暦一千九百年、黑龍の水血なりき』と。

二

いざ天かける想像の無象の翼身に借りて
恨も長き黑龍の岸のその日の様を見よ、
煙塵空を暗うして　隊の虎狼かけりきぬ

大江の音どよむまで見よ號哭を天にあげ
老幼男女いましめの繩に驅らるゝ數五千。

同胞五千いくとせかこゝの異鄕のかりずまひ、
錦文ゆふべ窓に入る故園干戈のおとづれに
思いためる夜半の夢あけぼの近くおどろけば
翼ならして荒鷲はやさしき鳩の巢におりぬ、
牙を揮うて豺狼は羊の檻に襲ひきぬ。

六軍の王師賊なりき、軍旗のほまれいづれぞや、
掠奪つきて驅られ來し清人五千途いかに
大江の水、天ひたすこゝ黑龍の岸のうへ、
まなこ焰に燃えひかる虎狼ひとしく哮え立てぬ。
『平和を破る清の民、とく、江を越え鄕に行け
群鴉亂れて聲あげて雲に入る羽は身に具せず、
舟やいづこ、橋やいづこ、清人泣きて訴へぬ

『順良の商估清の民、いかで平和の敵ならむ、
流は墳墓、大江の逆捲く波を君見ずや』
虎狼涙に和がじ露人の答たゞ砲火。

いかづち落ちぬ、白日の光は暗と消え失せぬ、
天の萬象ことごとく怒のあらし吹きさりぬ、
雨か彈丸の空飛ぶは、夜か硝煙のうづまくは、
伏屍は岸に山を積み、溺屍は江に水せきて、
聞け號哭と喚叫と、天地は今か修羅のちまた。

恩愛の父子手を取りて奔流の波にさらはれつ、
新婚の夫妻抱きあひて虎狼の兵に屠られつ、
泡の大水に消ゆるごと粃のあらしに散るがごと、
藁の猛火に燒くるごと蠟の焰に熔くるごと、
恨を呑みて罪なくて逝けり平和の民五千。

三

江流逝いて波暗し浮べるかばね今いづこ、

去れよ四千里わだつみの底は露人の影なきに
去れよ長鯨潮を吹くあらび露人にしかざるに。

岸のしかばね青白く鉛に似るを誰か見る、
齒をくひしばり虛を握み砂泥にまみれ血に汚れ
天を仰ぎて倒れ臥す慘憺の姿たれか見る

綾羅ひとたび紅の花を包みし袖いかに、
銀鬚きのふは幼子のゑみを迎へしおもいづれ、
無垢はさながら白蘭の蕾に似たる魂いづこ

其さま見じと『夕ぐれ』はおもてを掩うて過ぎさりぬ、
『夜よあらしに吹かれきて暗のころもに彼を蓋へ、
陰火亂れて啾々の魂は恨に堪へざるを。

千秋ほかに比なき悲劇のあとはかくなりき、
いざや陰府の火を逃れ血汐の壺を傾けて、

サタンよ祝せ、人の世になんぢのよさし尙盡きず。

四

萬馬のひづめ飛びさがふ兵火のあらびいくたびぞ、
敎徒の怒血に燃えて倒れし犧牲いくばくぞ
さはれ史上の幾千の時の記錄に見るべきや、
神を崇むる大帝の六軍の師故なくて
羊に似たる外邦の五千の民を屠れるは。

見よ幻を天の中、銀鬚かゞやく一巨人、
無限の光胸にあり、鮮血のあと足にあり、
『われ東西の文明の光を一にあはしてき、
露人の罪にわが終、見よかくまでに汚れぬ』と
『たそやなんぢは』彼答ふ『十九世紀の靈を見よ』

玉殿の夜靜かにて星斗まぶたの重きとき、
錦繡のとばり暗うして香のかすかにくゆるとき、
高塔の鐘しづまりて侍衞の夢の深きとき、

東亞の領のおとづれに寶冠ひとつひれふして
その民のため國のため罪を萬軍の主に謝せよ。

嗚呼五千の靈、淸人と彼生れしや何の罪、
彼牛羊に劣りしや彼禽獸に類せしや、
覆載の恩故ありて造物彼に拒みしや、
さきは一たび無知の暗、頑冥の夢さめやらず
血を宣敎の二師に染め、罪に一州の地を替へき
いま朝政のかげもなき國步のなやみ時の不利、
『同胞五千罪なくて異鄕の暗に魂泣く』と
率土いづれの處にか彼はた寃を訴へん、
嗚呼北極よ、南極よ萬邦の民の良心よ、
基督敎の道德よ、十九世紀の文明よ、
告げよ！――皇天の正義今無きや。

六

世界の義人聲なきや、爾の耳は聾ひたりや、
基督敎徒たゝざるや、四海同胞の訓いづくぞや、

普天の詩人鋼鐵の一絃すでに絶えたりや、
かれパトモスに現はれし幻今は跡なきや、
さきにシオンに照りいでし光は暗に沈めりや。

人種のはだの白か黄か差は愛憐の妨か、
神にふたつの道ありや、愛にふたつの別ありや、
『愛の敎の一の民罪なきわれの血を流し、
愛の敎のほかの民皆そのわざをよしとしぬ』
異敎の民の訴をわれ願はくは聞かざらむ。

その悽愴の訴を無情の耳にきかむ前、
震へる魂よ、ひれふして高き至聖の名を思へ、
時は遙けしいにしへに返る一千九百年、
橄欖山の夜半の暗にあらしも泣けるゲッセマネ
そこに憂の盃うけて祈りし影をあゝ思へ。

七

嗚呼事終り罪なりぬ、千秋の悲劇かく過ぎぬ、

なんぢ無象の羽かろき黑龍江の岸の風、
九天のあなたセラヒムの萬軍の列かきわけて、
咽ぶ銀河の波と共に永く露人の罪鳴らせ、
なんぢ滄溟の水に入る黑龍江の波の音、
五千のかばね葬りし流の響たえずして、
四海の濱にとこしへに高く清人の寃を喚べ、
七星北斗十二宮夜半の光滅びずば
神人共に憤るこの兇戾の罪しるせ、
寃を憐む百世の義人なんぢに聲あらば、
東亞の圖上大江の線を血汐に染めていへ
『西曆一千九百年黑龍の波此色』と。

登高賦

玉露しづかに空を洗ひて乾坤又も秋を見る、
歳は明治の三十三、西曆一千九百年、

太虛のおもて永劫の中、人界の爭あゝ未だ盡きじを。
さはれ見よ萬古の眞、自然の色はとはに澄む、
天地蕭森の氣を湛へて山川遠く畫圖を披く
五城樓外西丘の夕思は縹緲の空に入る。

あゝ今江山秋に入るその秋の精秋の風
吹くか星斗の震ひ動きて靈の如くに消ゆる空より、
太虛の呼吸清く遠く空に搖曳の雲を拂うて。

星雲の影こほらんとして銀漢の波咽ぶほとり、
天上秋の光引いて今搖落のわが世に下り、
遠く鴻雁の列を誘うて下界の山河いづれを經るや。

楊柳の岸かげうすくセイヌの流咽ぶ處
菩提樹畔の逍遙の群も夕に消ゆるほとり
弦月旗はしづむボスホル海峽の暮。

牧笛聲は愁ふ中央亞細亞の野、
行いてシベリヤ大荒の東黑龍の水萬古咽んで、
神人共に憤る蠻族の罪をかたる處、
去りて黃海の波を越え長白山の雲を拂ひ
更に遙に扶桑の空に玲瓏清き富士のたかね、
其影やどす東海の名も清見潟田子の浦
鏡とすめる波のおもに秋をしらして過來しや。

白蘋の州、紅蓼の岸、漁翁の夢の清き處、
鮮血の流、！體の岡、文明の鬼の狂ふ處、
山川風土互に替る大地の旅幾千里、
玉殿のゆふまぐれ醉生の夢を驚かし、
落葉の夜半の窓詩人の情を動かして、
中天搖曳の雲と共に吹きさり吹きくる無限の秋風。

五城樓外西郊の夕その秋風の聲に色に
高きに登り眺めやりて獨り悠々の思つきず、

英雄の覇圖猶あとをとむる廣瀨の流青葉の森、
水は寒山の影をひたして溶々遠くはしるあなた、
碧は深し萬里滄溟の水、其波を越え海を越え、
行く行く吹きて雲を拂ひ思を誘ひ詩を含み、
天地の呼吸清く遠く無限の旅を追うて進まん。

千叢のすゝき波を亂して滿山の秋今まさに深く、
夕陽いつか西に入りて餘光の遠く溢るゝ處、
山河自然の雄麗に寫すは天上無窮の榮か、
その雄麗の景に對し、この清冷の風に吹かれて、
思は長し氣は遠し、―― 塵骸しばらくは聖かれよ。

人間歷史ありてより星移り行く五千載、
進化のあとは短くて禽獸の域遠からず、
一塊の地球今も猶たゞ反噬のにはとして、
愛の權化の敎の祖基督世紀第十九
その最後の秋風はこゝに悲哀の曲と吹く。

詩人哲人いくたりか我世にいでて道說ける、
靈鷲の峯に法の歌橄欖山に愛の聲、
オレブ、シナイの嶺の上、アラビヤ、ペルシヤ野の邊
光は暗にかゞやきて名あり言あり道ありき、
遺流千年遠くして今聖壇の焰消え、
博愛の敎悼むべくたゞ呑噬の具となりて、
虎狼みだりに滔天の罪を文明の名に犯す。
妻は瀆され身は斬られ國は削られ屋は燒かれ、
天を仰ぎて血に咽ぶ民よ『異敎』は何の罪、
大義を叫び唱ふべき輿論の聲ももだせるか、
良心の麻痺に耳聾ひし基督敎徒何の名ぞ。
美妙の天地かくし猶たゞ流血の場として、
世紀最後の秋風は悲哀の曲と吹き去るか。

嗚呼おほいなる無窮の靈、
天を張り、海を舒べ、雲を卷き風を吐き、
日月を驅り山嶽を震ひ

千萬の星を鑄て千萬の世を治め、
風にありて吟じ人にありて歌ひ、
花にありて匂ひ、星にありて照り、
俗僧遂に悟らざる、迷信遂に穢さゞる、
宗派おのゝに占め得ざる、空理ひとへに知り得ざる、
愛の神、神化の神、詩人の神、
爾の胸にわれよりて爾の靈にわれ祈る。
合理必ず現實に、現實必ず皆合理、
有情の天地いつまでか常に混擾の局として、
人種の差異に同胞の四海の愛を壞るべき。
爾の呼吸願はくば天のはてより地の隅を、
拂ふ無限の風として禍惡等しく清め去り
光と愛と詩とをして永く此地を掩はしめよ、
世紀新に梦る後、秋風愁の曲ならず
あらしの聲も天上の無窮の樂とひゞくまで

（一九〇〇秋、仙臺山外西郊見峠に於て起稿）

夕の姿

鐘のひゞき、水のひゞき、
うするゝ光、うするゝ烟、
あゝ別なり夕の姿。

しづまる風、收まる雲、
睡る花、覺むる星、
あゝ別なり夕の姿。

無韻の歌、無窮の敎、
無聲の樂、無限の思、
あゝ別なり夕の姿。

あゝをさなごが甘き乳を
愛を湛ふる母の胸に

頭をよせて眠る如く——。

『夕』のころもの裾のひだに
浮世の煩浮世の惱
つゝみて靜かにわれは休まん。

おほいなる手のかげ

月しづみ星かくれ
嵐もだし雲眠るまよなか
見あぐる高き空の上に
おほいなる手の影あり。

百萬の人家みなしづまり
煩惱のひゞき絶ゆるまよなか
見あぐる高き空の上に
おほいなる手の影ありゝ

不朽

フィルドーシは西暦九百四十一年、波斯コーランサンの一市チウス郊外に生る。大王マームード四隣を蠶食し、威名を中央亞細亞に揚げしが、また文物典章を重んじて、カズニの都に廣く學藝の士を集め、一朝フィルドーシの大才を認めて、彼に優詔を下し、波斯古來の神話傳說の逸聞歷史等一切を詩化して列王の英名邦家の偉蹟を不朽ならしめんとし、約して曰ふ子が詩作一聯行ごとに一「トマン」(八圓餘の金貨)を以てすべしと、詩人この命を受てより慘憺の意匠を凝すこと三十年六萬聯行(イリアッドの約七倍)の大篇を作り「列王詩紀」と題して之を大王に獻ず、大王よりて約せし金貨を與へんとせしに、佞人ありて之を阻め、金に換ゆるに銀を以てし、之を巨象の脊に載せて詩人に贈らしむ、フィルドーシ、王の欺騙を憤り、滿載の銀貨を分ちて悉く之を僕婢に與へ、孤身孤然都を去りてまた還らず。しばらく涙々の生を

送りしのち故山に歸りて形影獨り相弔ふのみ、白髮の詩聖歳巳に八十餘、大王後にいたりて悔甚しく、百頭の騾五十頭の駱駝に金銀珠玉家具服飾食品食料一切を積み、更に十二頭のアラビヤの駿馬十二人の强壯敏捷なる黑奴とを添へ、侍臣に命じて行きてフィルドーシに贈らしむ　行程八日にしてチィスに着し、城の西門に入るとき、たまたま東門を出づる哀哭の列あり是フィルドーシの葬式なりき。

ハイネ嘗てこの事を、ロマンチエロ」中に詠じぬ。左の一篇もこの史蹟を基とす。篇中題引用のソーラブ、ラスタム父子がオクザス河畔の鬪は列王詩紀中尤も沈痛なる一節なり。

一

ガンヂスの大河流れて
五天竺うるほすかぎり
大王の稜威の光
カスピヤの海に波なく
アラビヤの漠もまつろふ。

妖氣の晴れ行くあした
そゝぎくる四海の富に
王城は春の世盛
並び立つ七寶塔は
紫の雲に冲りて。

落日の焰收まる
玉殿の夕のうたげ
玉盃の數を重ぬる
君王のおもわ照して
三千の花のともしび。

白日の光る胸より
ぬばたまの暗の生るごと
歡樂の極みより湧く
かなしみの黑衣の姿——
あゝ王者、なれも塵なり。

波たちし歌吹の海の
名殘今あらしに紛れ
「チブレス」の杜の蔭より
悠揚の悲歌のひとふし
『ソーラブの最期』を謠ふ。

弦月のかすかの光
オグザスの岸をや照す
英雄も末は黃土か
マームード頭を垂れて
露しげき御階にたゝす。

紅血のうしほの流
湧き起る臟に鋭針を
貫ける痛も斯くや
哀吟の節に答ふる
大王の胸のゆらめき。

けたゝまし御苑の孔雀
金繡も今は暗なる
夜深きに何の夢見る
星ひとつ空に流れて
曉に逝く魂あらむ。

『千載のむかしのほまれ
ラスタムの非命の子の名
千秋の後に傳ふる
入神のたぐひなき歌
彼なりきあゝフィルドーシ』

『王は我、かれは詩の聖
汀なる巖をうちて
荒波の碎くるがごと
爭ひし二つの心
われとかれ、あゝフィルドーシ』

『絶崖をひたに落して
觸るゝもの碎かざるなく
おとし來てわれも碎くる
大巖――怒もしかぞ
罪深し王者の狂』

『おも疵になするバルザム
焦土にそゝぐ夕立
わが悔の量をあらはす
千萬の寶集めて
慰めむ老のいまはを』

二

邊城のあしたの夢を
譬躍の聲に破りて
くれなゐの旗を眞先に
野路遠く塵を亂しつ
幾百の騾馬に駱駝に

ゐみのすは何の寶ぞ
羣を驅る御者の聲ぬも
暖れぬ八日の旅路。

紫はシドンのたくみ
紅はタイルの錦
乳香と蜜と沒藥
百の瓶ナタルの油
ベンガルの沖の底より
拾ひしや綠の眞珠
オヒールの高き山より
穿ちしや濃藍の玉。

大漠の星夜の空に
たてがみの露を拂ひて
風と飛ぶ十二の駿馬
亞非利加の岸をはなれて

身のたくみ仇と賣られし
漆なす十二の黑奴
率ゐさり率ゐ來りて
隊向ふいづこの果ぞ。

三

澄みわたる心の空に
かゝるべき雲は今無く
しづむ日を故郷に眺むる
白髮の詩聖のおもわ
靈の火の光に照りぬ。

天上の火輪の焰
天漢の名殘のしづく
破壞の『時』力合せて
碎くべし七寶の塔
破るべし帝王の宮。

獨りわが建てし詩の城
千萬の人の心に
基おく靈の大殿
千載の末を待ち得て
光のみいよゝ增すらむ。

三十の春また秋に
織りつぎし錦繡の段
六萬の聯行の文字
とこしへに世々の光と
萬邦の民は仰がむ。

塵寰の富にほまれに
煩惱の夢に迷に
大王の笑に怒に
いにしへはわれも狂ひき
今はたゞ靈のよろこび。

昇るにも猶もいやまさる
落日の比なき影
燦爛の無垢の淨光
照せわがいまはの姿
フィルドーシ世の業をへぬ。

四

チウスの城、西の門より
『おほいなりアラーの德』と
百の聲ひとしく叫び
亂調の樂のひゞきに
千萬の寶護りて
大王の使進みぬ。
東の門今過ぎて
咽び泣く笙鼓のしらべ
『休あれ逝ける魂に』と
祈りゆく黑衣の列

錦繡の榮をよそなる
木棺にあゝ大詩人。

富嶽之歌

星
夕をかざる玉鈎の一彎遠く消沈み
暗人間の世に落ちて今は壺中の夜もなかば。
有聲無象の窮まりはこゝ穹窿の空の上
數も千萬永遠の姿を凝す星の花
わが射る光途遠く流るゝ末を見おろせば——
影朦朧のたゞなかに西崑崙の雲の嶺
冷煙こほりうづまきて泰山暗し鬼神の府
羅浮天台のおもかげも今は下界の暗の底。

千里二千里三千里烟波眠れる東海の
うな原遠く眺めやるわれらの光さすところ
渾沌の世に湧き出でし姿不變の富士の嶺
太古の雪の膚清く暗を照して立てるかな。

あらしも今は收まりて人籟絶えぬさらばいざ
光と共にわが露を露もろともにわが歌を
下し送らむ仙嶺の頂遠く裾廣く。

露

光含みて珠とこり珠とこほりて露と呼び
暗にもしるき香を添ふるわれ銀臺の星の精
長松の蔭暗うして鶴の靜かに眠るとき
幽谷のあらし收まりて蘭の微かに匂ふとき
西に傾く銀漢の流の末と下り行く。
行くへは遠し東海の波間に近き富士の嶺

嶺に下りて白銀のまた黄金の水湛へ
麓に布きて花の上帝鄉の夢もの語る。

嶺上明水

珠貫貝聯かけ凝り玉露となりて嶺の上
千古の雪のしたゝりも交へ湛ふる水かゞみ
映る光は仙嶺の夜半の星のこほる影
酌みて飛仙の盃の沉溺の味思ふべく
餘滴靜かに谷あひに玉と碎けて走りては
行末遠く香を浮けて麓の花を誘ふべく。

花

高ねおろしの夕かぜに
われ咲き匂ふ花の子ら
こよひ御空の友そゝぐ
戀のしづくぞ身にしげき。

見渡す廣き大裾野
夜のといきにいらへつつ
かしらを垂れて行く水に
さゝやく思人やしる。

こゝに開きてこゝに笑み
こゝにしぼみてこゝに散り
過ぎし幾春幾千とせ
自然の子らと友なりき。

御いつかしこきみこの手の
かざすつるぎに散る焰
夷滅びてすめろぎの
よさし廣みし世もむかし。

時おし移り紅に
白きは替る族の色

君が裾野の狩りくらの
たけき競ひし樣もまた。

春のつばくら秋の雁
いそぢの驛の行返り
振ふ錦の花の袖
うつろひ行くもきのふにて。

いつしか布かる黑がねの
道に近づく西ひがし
烟あらしになびかせて
火輪かけかふ世の姿。

時は移りぬ人去りぬ
獨り裾野の花の子ら
昔へぬむかしの香をとめて
胸にはつゝむ歌絶えず。

こよひしづくの身にしけき
御空の星の戀の歌
受けて傳へて行く水に
さゝやく思人しらじ。

流

銀蛇幾すぢ幽谷の泉しづかに集りて
ねは玲瓏の玉いくつ碎けて走る夜の空、
西と東のいさら川流るゝ道に呼びつどへ、
靈山の名を身に負ひて下るも長し六十里
けさは浮べぬ白帆かけ、夕は洗ひぬ汀の日
今はた誘ふ一ひらの花にのせ行く星の夢、
わだつみさして道遠く行けば流れん時も世も。

海

潮は通ふ東海の流みなぎる三千里
銀山碎け飛散りて行くへ四海の沖はるか、

經緯度替る百の岸洗ひて歸る千重の波、
波は明珠の影鐫りて光は震ふ星の色、
いさりび時にほのめきて煙は迷ふ清見潟、
夜深き岸の松が枝に仙女の樂は響かねど、
こゝに流の送り來し花に無限の春の歌、
あしたの光にほふ時我も自然の樂かなで
扶桑の鎭靈山の姿を波に涵すべく。

風

其影宿す萬頃の東海の水下に見て
高ね下りし夕あらし、無象の翼身は輕く
北斗の影も見えぬまで波路はるけし幾千里
椰子橄欖の香ににほふ南溟の空吹拂ひ
暖潮の蒸すむらがる友をいざなひて
今こそ歸れあけぼのゝ空合近き富士のもと。

雲

歳のなかばは夜の暗、暗に替れる紅血の
日に氷山の影ゆらぎ、浪もあらしも凝り行く
千古の冬の北洋の眺さびしき空の上、
萬里を翔くる鵬の羽を忽ち借れる自在の身、
南をさして驅け行けばよもより集ふ友の群
率ゐて寄せん東海の芙蓉の峰の空近く。

詩神

はやも下界の空しらむ、時風雲のいざよひに
天地創生のあさぼらけ昔のあとぞ忍ばるゝ、
暗は逃れて旭陽の光はじめて照りしとき
四大おの〳〵其則に就きて渾沌の去りしとき、
われ九天の水引きて東海萬石の波湛へ
玉闕の柱つんざきて芙蓉千仞の基おきぬ。

天地の間靈嶽の氣に清風の吹きてより
黄鶴露を吸去りて秋白帝の樓に飛び、

青鸞花を啣み來て春瑤臺の仙を乘せ、
彩雲永く一帶の天衢に通ふ路引きて
神韻妙詩おのづから嶺に收まる數千秋、
此邦いまだ此山を歌はん聲はあらずとも
玉露明星もろともに永く宇宙の靈に聽き
花蕚川流とこしへに中に不朽のしらべあり。

嗚呼東海の君子國、史は百王の跡遠く、
二千餘年の春ふけて斯文の華の遲くとも
香はかんばしき千載の未來の望無からんや、
群巒遠く下に見る芙蓉の姿雪の膚
清きは民の心たれ、高きは民の思たれ。

積水淵を湛へては、うちゃ蛟龍の湧く如く、
積塵山を築きては、かみ風雲を捲く如く
長きに忍ぶ此邦の理想は實と現はれて
天地無窮の『美の靈』に民の融化し入らんとき、

扶桑の俗を改めて八朶の芙蓉比なき
影東海の波のへに萬邦の仰ぎ視なんとき、
其時今にほのみせて靈山の空明けわたる。

見よ萬頃の海鳴りて波は黄金の花開き
紅雲錦の粧を凝らす朱陽の曙の色
希望の光うらわかく峰千秋の雪に照り
愛と匂と聲樂と皆ひとつなる天上の
無限の譽ほの見する富士の高峰のあさぼらけ。

(註) * 弦月のこと。
** 富嶽の頂に、金明水「銀明水」あり。
*** 星のこと。

附錄

(ヴィクトル・ユーゴー詩集の中より)

汀上の逍遙

第一逍遙

すさまじき潮の底の渦卷の
祕密の淵より湧き出でて、
みどりの波のたゞなかに、
泡沫のあらし雪と碎けぬ。

此飛沫の淵より神は何を造り給ふや、
曙の光はこゝに何を注ぐや、夕の暗に何かこゝより出づるや、
海はこゝに注ぐ、いたづらに其波を、
雲は其霧を、あらしはその響を。

あらしは其響と共に潮は其泥と共に過ぎさりぬ、

漁人の恐るゝ旋風は
このものすごき淵の中に現れて
常に同じ場と同じ沫とを保つ。

漁人は語る、「かしこに尊き波の上に、
失せたる幼子は降誕節の夜を待ちて
人界に汚れし其翼を清めんと來る、
天使となりて天上に飛去る前に」と、

われは曰ふ「神は潮の先に絶壁の先に
かしこにかく白き清らの場をおきぬ。
おほいなる自然の胸の中
惡のたゞなかに善の姿たらしめんため」と。

第二逍遙

海には泡、陸には沙、
みどりの中に黄金の光は白銀の光と混じぬ、

われは洋々たる大氣のひゞきをきく、
遂に沈默におほはるゝ遠き大なる響をきく。
吁く海の岸にひとりの幼子は歌へり、
何物もおほいならず、何物もちひさからず、
神は創造の上、受造の上に
同じ黄金の星と同じ綠の大空とを置きぬ。

われらの運命は微、われらの幻は美、
靈は身體を捕へて大空にあぐ、
人はおほいなる二つの翼に飛べるもの、
ひとつの翼は思想、他の翼は愛。

すべてのもの靜まりて、儼然にやさしく、力あり
舟は港に入り鳥は巢に歸り
すべてのもの去りて休みにつきぬ、余は
大虛の中に無限の愛「脈う」うつを覺えぬ。
たゞ風——彼は巖の上に蘆葉をかゞめ

また歌へる幼子の聲をはこびさる、
嗚呼風彼は草葉をかゞめぬ、
また同時に遠く歌をはこびさるよ。

そは何かあらむ、こゝに物みな互に愛し互に睦む、
心の中に暗なかれにがき思の惱なかれ、
言につきせぬおほいなる平和は
絶えず大なる靈の底より大なる波の上に來去す。

第三遣遙

日は傾きぬ、夕』は彼を追ひて
地平線上を染めぬ、
汀上の石によりて白髮の一老翁
悄然として落日に向ひて坐しぬ。
彼は老牧者なり山上の牧者なり、
昔はわかく貧しく幸なりき自由なりき、

夕の影丘陵をねぶりしとき
其笛林中に幾たびか響けける。
今は老いて富める過去のかたみ
彼はおほいなるやからの長となりぬ、
牛羊野より歸り來るとき
世を離れて彼は天を思ふ。
沈まんとする日は昇らんとする日に劣らず、
老牧者はこのみどりの天の下にゆめむ、
日前の大洋は悠々波を湛へて
墓に臨める義人の希望に似たり。

嗚呼おごそかの時刻よ、山、海、風
悉く默して其騷ぎを收めぬ、
老翁は將に沈まんとする日を望み、
日は將に終らんとする老翁を望む。

第四逍遙

神よ影に染む山々いかに美しき、
海いかにやさしき、空いかにすめる、
過ぎ行く月日何かあらむ、
我は無限に觸れぬ、我は永劫を見ぬ。

あらしよ、うれひよ、我靈の中に默せ、
我心かくまで神に近づきしことあらざりき、
落日は焰の目もて我を見ぬ、
大いなる海我に語りぬ、われは身の聖きを覺ゆ。

我を憎む者に幸あれ、我を愛する者に惠あれ、
我はわがすべての時を靈と愛とに與へむ、
譽を求むる者は愚なり理をあさる者は愚なり、
余は——余は只愛するを知るのみ、殘れる齡幾何もあらじ。

紅日沈みかゝる海上より星は出でぬ、

鳥は歌ひぬ、波は脚下に叫びぬ、
莊嚴のたゞなかに日は落ちゆきぬ、
あゝ見よ靈いかに大なる、人いかに小なる。
すべての造られしもの、燃ゆる火、震へる海
みな至上者の名をたゞなかば知るのみ、
彼等の發する響を集むるはわれなり、
おの〳〵のものは片言を綴り余は全句を語る。

淵よ、爾と等しくわれ聲を天に揚ぐ、
海よ、我爾と共に夢む、山よ余爾と共に祈る、
自然は清淨永遠の香
余は——余は優美有情の香爐。

人　深淵

あらゆる非生の間にありて獨り生ある靈を見ずや、
猛獅を沙漠に逃げしむるものは我なり。
戸閉づるとき鍵を造るものは我なり。
われはパッカスといひ、ノアといひ、ユーカリオンといひ、
シェークスピヤといひ、ハンニバルといひ、シーザアといひ、ダンテといひ、
勝利の劍を取り『影』を逐ひ、暗を驅りて、
あらゆる恐の中に入り、あらゆる暗の中に進む。
われプラトンとなりて能く見、
われニュートンとなりて能く探る。
光榮のアテーヌは鴟より出でずや、
壯大のローマは狼より起らずや。
大空の猛鷲驚きていふ『わが途遂に爾におくる』と。
われ墓の中にキリストを有し塵の中にヨセフを有し。
衡平を保ちて兩手に肉と靈とを運ぶ。
われ遂に人なり主なり自由なり。
我は古のアダムなり、我よく愛し我よく知り我よく感ず。
我『生命の樹』を抱き、さながら嵐の呼吸の如く、

金果果々の枝を震ひて曰ふ
『民よ走りて而して拾へ』と。
かくてあらゆる果物は雨の如くに落ちぬ。
わがため、わが子のため人間のため、
科學は惠の天より降り生命の果は永劫の根よりいづ。
あらゆるもの萠し、あらゆるもの育ち、
野火の林を掃ふが如く『進歩』は天を仰いで走り、
『過去』を呑み去りて萬物みな進み行く。
われ欲すれば物みな從ひ、不屈のもの悉く讓る、
われは全能の神に似たり、
彼は蜜を作り、われは酒を釀す。
先に獄なりしもの今は宮殿なり。
われ南極と北極とを結び、
靈を電光の翼に載せ、
ネムロッドの鐵弓を張り
鏑を鳴らし矢を飛ばし、
西海に放ちてわが言となす。

距離なるものは今すべて存せず
ライン、ガンヂス、オレゴンの流、
わが見るところ恰も同車の旅客の如し。
老いたる巨人其名は「望」といふもの、
我今之を矮人となしぬ。
わが奮進の前タイタン嫉みて頭をもたげ、
フランクリンの電光を飛ばすを見て
コーカサス山上驚の聲ありのり。
むかしヂュピタアが塵中に投ぜしもの今フルトンとなり。
鯨鯢を驅りて大海をわたる。
カルバニは「死」を滅し、
ボルタは天使の劍を熔す。
世界はわが聲に震ひて替り
カイン死して「未來」は若きアベルに似たり。
我再びエデンを得んわれ再びバベルを興さん。
我なくば何ものか存せん。自然は初なり、我は終なり。
嗚呼地球。爾の主なり王たる我を見ずや。

地球

爾はたゞわが一小虫なり。
睡眠、憂苦、冷熱、飢渴
爾に無數の煩を負はす。
爾老いては幻なり、死しては爾たゞ影なり。
爾は塵に去り、我は白晝に殘る。
われは常に春あり、花あり、愛あり曙ありて、
千萬の年を經て猶わかし。
我一粒より大樹を作り、我一核より長松を起す、
我は葡萄の房を染め、或は黃穗の束をつかぬ。
晝の十二時夜の十二時、はでやかなる姉妹の如く
手を取り舞うてわがおもてを廻る。
我は源なり、混沌なり、われ物を葬りわれ物を創む。
綠の空に「朝」の生れしとき我そこにありき。
ヴエスビアスはわが工場なり、ベクラ山はわが吹爐なり、
我はエトナの高き煙突を赤うす。
われクツコー山をゆるがせばピレネースの嶺また震ふ。

我に僕として星ひとつあり、
『夕』來りてわが一面に黑布を掛くる時は
やさしき月ありてわれを照す、
囚人もし森の中に、暗の中に
影の中に逃るゝときは
我この燈を取りて彼を追ふ。
われ火の中、波の中、空の中に生を起して、
或は虫を生み、或は颶風を生み、鯨鯢を生む。
わが生ける圓球は大水森林高山に
掩はれて恰も胃を被るに似たり。

土星

微かにつぶやく聲は何ものぞ。
地球よ、爾の一粒の砂、
かの一片の灰に伴はれて狹き境を廻る何の用ぞ。
我は壯大の綠空にわが大圓周を畫く
太虛は見てわが雄麗に驚く、

わが大寰は青白き空を紫にして
恰も金丸の如き七の大月を抱く。

太陽

しづまれもだせ大空のもとに、わが遊星よわが群臣よ、
我は牧者なり爾は牛羊なり、
二つの車大門を過ぐる如く
土星と地球と並びてわが最小の噴火口に入らむ。
混沌よ我は法なり、泥よ、われは火なり、
見よ、われは生命なり中心なり、
太陽なり、永劫なる光のあらし也。

天狼星

あゝ此原子何をか語る、もだせ塵なる太陽、
もだせまぼろしよ微けき光よ、
其牛羊大空に散る牧者よ、遊星のあるじよ、
綠の空の中爾七八の牧をもてる何の效ぞ。

我は壯大なる圓球の中に百千の火球あり
其火球の小なるもの猶百の月を有せり。
あゝ夫の微球と並びてかゞやくも益なし、
矮人星は巨人星を知ることあらじ。

アルデバラン

天狼眠りぬわれ覺めぬ、かれは殆んど動かず、
我に白と赤と綠と三の太陽あり
各々世界の中心となりて無形の鎖に繫かりてめぐる。
其速きことさながら醉へる焰の如し、
電光は曰ふ「われ彼等に從ふこと能はず」と。

アークチユーラス

我に四つの太陽あり、
其よつの光たゞ一道の電光をなす。

慧星

われは「夜」の恐なり慧星なり、
われ過ぐ、震へ衆世界よ衆太陽
我見るところ爾はおの〳〵たゞ一粒の芥子なり。

北斗七星

神祕の腕われを常に大空にもたぐ
われは北天の燈明臺七の枝を有するものなり。
わが火は一切の終る太虛のはしに目ざむ。
北極より南極にあらゆる赤道のもと、
あらゆる熱帶のもと、あらゆる宇宙は曰ふ
『これ恐るべき極天の黑守兵なり』と。
暗き天空の清氣、衆圓球に滿つるもの、
かれ我の何たるを知らず。
我大空に目ざむる時彼われを見つめ、
大なる光われの進むとき、
彼たちて震ひて、わが進軍の響を聞かんとす。
彼われを天空にさまよふ巨獸と見なして

われに恐るべき名を與へぬ。
我は北なり光なり、目なり
生ける七つの目太陽を瞳子とするものなり、
永劫の暗に照る永劫の焰なり、
われは爾等の上に現ずる北斗七星なり。
天狼は其すべての圓球を合して
猶わが最小の爐中一點の火花に過ぎず
我が二つの火の間に百千の世界は悠々としてあり。
われはひかる天空の頂に住む、
彗星の光もみどりの深空に轉ずるわが車に觸れじ。
天の衆星その黄金の球と
白銀の月とを曳いてこゝに來りかしこに去る、
我もし進んで夫の精氣の大海に入らば
一切の太陽皆わが途に碎けん。

黄道十二宮

爾の道わが道に比せば何かあらむ、

爾の光天のいづこより來るも
皆深淵の底盤たる我にあたる
我は衆太陽にいふ、爾去れ
『爾來れ』『今爾の順なり』『我爾を呼ぶ』と。
我こゝにありて人は綠の空の中に
弓手に逐はれて猛獅、金牛、白羊の走るを見ん、
われまた祕密の井中にかの寶瓶をしづむ。
我は巨大の輪機なり。無象の秩序
われより出でてかすかに光る深淵に下る、
聖なる空よ、目もし爾の深奥に入り、
おほいなる恐怖のたゞ中に入らば、
聖きフレガートンの流に黑むイキションの如き
恐るべき罪人、苦めるおほいなる魂を見ん。
かれらは高きに至らんとし、
あなたに走る星を棄てこなたに來る星に乘りて
深夜のすごき階段を上らん。

銀河

百萬千萬無量億の星
すごき影の下、きよき覆(おほひ)の下、
我は莊嚴なる星宿の森なり、
我は目と光との集合なり、
さびしき、音なき光の厚みなり、
わがかゞやく淵は常に劫初の流に溢れて
あらゆる爾等衆星の源なり。
嗚呼低きにある星よ我は爾を去ること遠し、
わが宏大雄麗不動の海、
わが無數の太陽の集は
鈍き爾の見るところたゞ大空の底にありて響の絶ゆる荒漠なり、
暗夜にひろがる紅灰の一片なり。
さはれ我が生ける光の中に入るものは何等の恐ぞ
わが紅雲を近きに見るものには何等の恐ぞ。
點はおの〳〵星なり、星はおの〳〵太陽なり、
星限りなし奇異壯大のもの限りなし、

或は天使に似たり、或は惡魔に似たり
遊星の數はた窮なし、
宇宙の衆群内に情あるもの、生あるもの
おの〳〵火焰の太陽をめぐる、
人おの〳〵心あり靈ありて、
六合にわたる眼目の映ずる鏡なり。
心おの〳〵愛あり、靈おの〳〵天あり。
おの〳〵生れ、おの〳〵死し、おの〳〵長じ、おの〳〵衰ふ。
内に光滿ち、内に暗溢る。
わが下の谷の中、わが光に眩めきて
遠きにかゞやく光の粒
なんぢ衆星、爾周球、爾彗星、
爾黃道寰、爾震ひて青白き太虛をわたるもの
爾の音は遠きに響く、胡角に似たり
我が太陽を有するは爾が蚊を有するよりも多し。
わが無限大は生けり、かがやけり、豐なり。
時としては千萬の世界暗き穹窿の隅に迷うて

わが光の中に消し去るにあらずや。

星雲

遠きを去る一片の塵、なんぢ誰にか語る。
太虛の中我殆んど爾の聲をきかず
我はただ爾を暗光として夜の絲の空の隅に知る。
我をして靜に照らしめよ、我は暗の白きものなり、
すごき混沌の中に生ぜる幽界なり。
我は南極なし、北極なし、
我は理想中の生けち現實なり、
廣大なる夢の群われよりいづ。
浩蕩たる精氣の大洋、涯なく岸なく
其流一たび去りてまた歸ることなし、
中に神祕の島嶼を造るものは我なり。

無限

一切のもの、わが暗き合一の中に生く。

神

我一たび吹かば、萬有等しく空に歸らむ。

故郷の墳墓

『冥想錄』(レ、コンタンプラーション)を亡女のかたみに捧ぐる歌

一

永遠の眠の床より起ち、冷たき布の蓋を去り、
目を擧げ手を開きて此書を取れ、
こを受くべきものは爾なり。
我が靈魂わが企望、わが夢、わが恐、わが悲、
わが生の幻、わが痛、わが光のあけぼの、また之に續ける愁の夕、
影とそのあらしと薔薇その花冠と、
みな此書中に混じ、みな此書中に生く。
或は樂しき或は悲き此書はいづこより起れるや、
陰霧をつんざく青白き電光は何處より來れるや。

四歳このかた我は凄冷の風雨に住ひき、
此書はこゝより出で來りぬ、神は口授しぬ、余は書き取りぬ、
余は風に散る一片の葉、靈は曰ふ行けと、かくて余は去りぬ。
而してわが此書を終りしとき、
此書形をとり初めて動きし時、
壁は綠羅を纏ひ塔は挽歌に
鐘聲を混ずる野なかの寺は我に語りぬ
「爾の歌は終りぬ詩人よ、そを我に賜へ」と
風吹き渡る碧の森また曰ふ「我そを請はむ」と。
花を點ずる牧野は曰ふ「そを我に賜へ」。
海はこの書の開くを見て曰ふ
「いかなれば我之を得ざる、かの書また一の舟なるものを」。
星は曰ふ「此讃歌を受くべきものはわれよ」と。
おほいなる風また叫びぬ「夢みる者よ、そを我に與へよ」。
しかしてあまたの鳥は曰ふ「人寰を遠く離れて育ちし此書、
君は人間に與へんとすや、翼に乘せてわが巣に運ばん」。
さもあらばあれ、わが書は風に與へざるべし、

あらしに狂ひて湖を呑吐する海洋また之を得ざるべし。
蜜蜂群がるみどりの野
時その針を轉ずる野寺の塔、また之を得べからず、
之を得んもの牧場にあらず、星にあらず、
鷹にあらず、鳩にあらず、すべての鳥にあらず。
巣にあらず。――われたゞ之を墓に與へむ。

二

あゝ昔八月、秋風の夕
飄然友を捨てゝわれ鄕を去りき
巴里の都はかなたに隱れぬ知人の影は一も見えず。
聲なく言葉なく見ることなくわれ獨り逃れぬ。
たゞこれ熒然たる一孤影。
たゞわれ知りぬ、われは其行くべき處に行かむと
嗚呼「われ惱む」の聲猶わが口に出でざりき。
而して深谷の底に引き入れらるゝ如く、
路の險夷空の寒溫、われはつゆも覺えざりき。
(往事さながら夢に似て山嶽いたみて聲も無し)

母と姉妹と屋裏に哭せる時、
われは失望の力に驅られて起ち、
散髪を北風に亂して歩も遲く、
古寺の傍、蕭條の郊野に行き、
天を仰ぎて彼女の墓に近寄りぬ。
樹林は囁きぬ『來るは父なるものよ』と。
かくて荊榛を踏みわけて荒墳の間を過ぎ、
苔に掩はるゝ石の上、亂枝のなかに膝つきぬ、
あゝわれ呼びしとき爾の眠いかなれば覺めざりし。
一竿を肩にせる無心の漁父等は怪みて過ぎぬ。
『かの思に沈める夢むるものやたぞ』と、
かくて日は暮れぬ長く印せる地上の影と
夕づゝの光と前後共に消え失せて、
われ獨りわれに聽けるものに訴へつ、
共緣の草の上、わが晴天の暮れ行くを眺めし處に、
點々にがき涙と共にわが萬斛の愁をそゝぎぬ、
一片また一片、緣の葉を心ともなく摘みとりて

忍ぶは彼のいはなけなかりし昔の日、
百合の花薔薇の花を我に持ち來りし時、
さゝやかの所にわが筆とりて、
くれなゐの指を染めつゝ笑みし時、
忍びてかくて墳上に育ちし花の香を嗅ぎて、
冷たき緣の床を見つめぬ。
其墳塋を貫きて射しはそれか靈魂の光か、
さなり幽冥彼を奪ひしうれひの時刻、
傷心の空と悲痛の胸とに響けるとき、
妨あらでわれかの墳を弔ひき、
あゝ今は…流よ、森よ、幽谷よ、彼女は知らむ(然らずや)
四歳このかた光照らざる淋しき心、われ行きて
かの墳上に祈らざる——そは我罪にあらざるを。

三

さればあゝかの暗き路、みどりの苔、冷の墓
陰林咽ぶ夕の野寺、
墳墓に注ぐ悼(たむ)の吐息、

その辛さは今しおもへば幸なりき。
この年ごろ爾何事をなしつるや、
暗きすみかの中、爾は生命を今見るや、
いかなる影の日時計もて爾は時を測るや、
爾は時に音なく他の眠れるものを押しやりしや、
爾はわれを待ちて半ば目ざめしや、
爾は無限の暗窓によりて影の中に旅人を探しつるや。
暗き永劫の中に來れる者を聽かんとて
緩く纏ひし葬衣の中より爾は耳を傾けしや。
『そは誰ぞやわが父いまだ來らじ』と、
かくて沈める船のごと再び暗に身を伏して
聲も微かに爾等ふたり共にわが上を語りしや。

けにいくたびか露を帶びて
庭より心よりわれはた百合花を集めけん、
けにいくたびかわれ野薔薇の花を集めけん、
いくたびか『明日は別れん』とつぶやきて、

アルフュールの塔にわれは訪れけん、
かくて愚にも風と迅き船とを待ちわびつ
まなく我手は悲みて開きぬ我曰ひぬ『もの皆移る』と、
かくて集めし花束は慘として暗夜に落ちぬ。
嗚呼彼女のわれを待ち侘びんを思ひ、
心に祕めし思を取りて
かしこに行かんものに託せんとせしも幾度ぞ
基督呼びしときラザロは眼を開きにき、
われ彼に呼びしとき彼の目いかなれば開かざりし。
影の祕密をふたゝびも『愛』の破らんとなしつるは
神のなしゝことを父も爲さんと願ひしは、
そはあやまてる擧動なりきや。

四

微けきたよりの此書いかで
行きてかの沈靜に囁き、かの岸に流れんことを、
愛の吐息愛の涙此書いかで
あなたに落ちて墓に入らんことを。

その墓さきには露と曙と春と接吻と
美はしき花嫁のゑみともろともに、
わが喜、わが心を呑みさりきを
いかで此書僞らぬ希望の叫、
嘆の歌、涙にくるゝ別の聲、
はた羽かぜ我に觸るゝ夢とならんことを、
さらば彼女は曰はん『あるもの來りぬ、われ聲をきく』と
此書いかで暗夜の中わが靈魂の歩たらんことを。

此書これ曙の白き鳥の、
はた夕暗の黑き鳥の飛びかけりあふ無數の群、
此書これ地平線外に走る『追憶』の翱飛、
此書これ囚居の戸よりわが送りやる渾沌の群。
空よあらしよ風よ雲よ、われ汝に之を託す。
しづかに我に囁く空の大波
いかで此書をいとしみて遠くあなたに送れかし、
風は心して散すことなく

冷たき墓にまめやかに
離れて遠きわがたまものをいたせかし。
嗚呼げにわびしき卷の中に、
大空の下に集めたるしらべの中に、
此書の中に歌謠の中に、
わが日、わが禍、わが悲、わが煩悶
わが愛、わが勞、わが日々の生を記したれば、
神なほいまだわれのみまかるを許さゞれば、
さはれまた我行きて彼に語らん要あれば
祕密とあらしとに滿てる此書の上に
無限の刼風の吹くを我感ずれば、
人界の暗と哀と思とを皆之の中に注ぎぬれば、
わが靈わが血わが心より
此わがさびしき歌の韻をわれの作りたれば、
いざゆけわが書、暗空を過ぎて
あらゆる遲き歩みの向ふあなたに
木の葉の如くたましひの如く

行きて青苔と暗夜と墳塋とに飛べ、
一切の名あるものゝ皆はしり行く深淵に行け、
墳墓の最も幽深なるかしこに落ちよ、
さらば彼女の側にかしこに眠る、光る莊嚴の天使の側に
見るものあらん此書の――此深淵の幽花の開くを。

五

あゝ曙のみどりの空爾は我を欺きぬ、
あゝ人界の幸爾をつらく我は償ひき、
世には墳墓に語るものあり、
さびしき青白き死者に語りて、
葬衣の黑きひだを震はし、
其言或はあらく或はやさしく
石を動かし波を動かし雲を動かし
宛も森の響の如く自然の一の聲となるものあり
我いまかゝる伴に加はるの權を得たり。
あゝわれ墓標のたゞなかを進み、
群木叢枝の中に髮を亂し、

靈魂暗に迷ひて棺上にうつむき、
鉛に釘に地上の蟲に、
冷かに笑める骸骨に、齒を喰ひしばる骸骨に、
指固まれる手に頭骨に、
祈禱を知る脛骨に悟を索めしも幾度ぞ。

あゝ我すべてを穿ちぬ、すべての底を探らんとしぬ、
禍福いかなれば世にまじる、われ之を知らんと願ひき、
われ問ひぬ『我何をか信ずべき』と、
われ光と曙とほまれと
たのしき幼子と清き乙女と
愛と生命と靈魂と皆悉く之を究めぬ。

我何を學べりや、われすべてを攫みて一も得る處あらざりき、
我多くの夜を見ぬ、我多くの空しきをなしぬ、
吾人何ものぞ、『つねに』の語は何の意味ぞ、
われ胸中に穿てる墓に

夢と愛と望とを皆悉く葬りぬ
誰か悟を得る、教いづくにある。
あゝ我ふたゝびいにしへに返り
草のうへ牧場のほとり森の傍、
夕燒の空にほゝゑみて幼きむすめの
白き小さき手を取りつ
喜に溢れ平和に滿ち、
空のかゞやくにまかせ、兒のあまゆるに任せ、
かの碧空とかの無心とに身の浸、さるゝを感じ得ましかば。
光る大神と、敬ふ天使と
われ此間に爭ひぬ、われ勝ちぬ、恐なかりき、悔なかりき、
俄にわが門『死』の前に
恐るべき暗影の不意の音づれに開けぬ。
あゝ神祕の靈、爾空しく碎けしものを殘して去りぬ。
爾わが天使を捕へぬ、爾彼を打ちぬ、
それよりこのかた墓はわが足の向ふ處となりぬ。

六

セイヌの岸の逍遙も今は叶はず、
われいにしへの道に今はえ行かじ
井の傍に衣洗ふ婦の如く
永劫の深淵の壁に突き當るの外はあらじ。
恐るべきソリムの爲め巴里はわれに閉されぬ、
ノートルダムの高塔は今沈默と暗夜とを有てるのみ。
而して頭上にわれは星辰の殿堂を仰ぐ、
吾は叫ぶ『ルーアン、キュール、カアテベック』と、
『影』はわれに叫ぶ『オレブ、セドロン、バルベック』と、
而して吾去らんとすれば『影』直ちに我を留め、
われにいふ『みどりの大空に向け』と、
われにいふ『爾の路は塞がりぬ、
爾いま夜と風と流とを見よ、
爾何をか思ふ、幽獨者、爾何をか爲す、
爾足下に大地ありと思ふや、
運命を離れて心ともなく爾何れに行かんとするや。
あゝ夢むる者、爾萬有天地を顧みて

波浪の中に靈魂の響を聞け、
爾もし世に意あらば顧みて俗界の煩惱を思へ、
爾もし髮に塵を泥ぜんとせば
せめては巨大の塵を求めよ。
爾道の爲めに苦むも猶之を外にして
おほいなる寂滅を見よ(寂滅の意に適はゞ)。
爾專ら再びのぼるべき天上界に賴りて
そこに爾の一片の塵骸を捨てよ。
あゝ天より流竄せられしもの
手を故園の星辰界にのべよ、
爾その曙の再びかしこにあくるを見よ、
爾おほいなる一切を見るおほいなる眼となれ、
爾萬有の融化し終るかのおほいなる神祕を思へ、
うまるゝ、生ける、進める、亡べる崩るゝ、
一切の人類、一切の墳塋を思へ』と

さはれ我心常に痛む、其痛むほとり常に同じ。

蒼天暗夜永劫遂に
一の靈を亂し一の塵を靜むること能はず。
天上穹窿の莊嚴の靈
以て涉を乾かすに足れりや。
あゝ天地は荒涼の墳墓、すみわたる夕夢むる森、
やさしき月をわれに示すもかひ無しや、
我はしづかに之を聞きてしづかにやさしき眠に入らなん。

七

あゝ花を、あゝ花を、われ集め得ましかば、
われかの二の冷き床に百合の花を集め得ましかば
われ花をもてわが青白き天使を蓋ひ得ましかば。
花は金なり碧玉なり黃玉なり瑪瑙なり、
花のたゞなかにこそ棺は埋まるを願はめ、
花は死者を愛す、神は其根をして
骨に觸れ其香をして靈に觸れしむ。
我かれを愛せしも今之をよくせざれば——
われのあなたに再び行くを神いま許したまはざれば——

冷き運命、彼我に迫りて父は悲み子は眠り
追寳われを苦めて墳塋彼をおほひぬれば——
今は一片の草葉をもわれ彼の
無聲の墓に投ぐるを得ざれば——
されば彼女少くも我靈を得んこと善からずや。
あゝわが屋の上に叫ぶさびしき風よ、
あらしよ冬よ其雹もて我瓶を打てるものよ、
海よ夜よ——われ彼の爲に此書の中にわが靈を置きぬ。
此書を取りて而していへ『こはわが後に
殘りて夢むる生者より來ぬ』と。
魂よこの書を取りて遠く隔つとも我聲を知れ
あゝ爾の灰は我が息みの床なり、
爾の墓はわが望なり、わが愛なり、わが信なり
爾の葬衣は常に生命とわれとの間にひらめく。
いざ此書を取りてこゝより神聖の歌頌をおこせ。
爾の暗き手の中に此書いかでまぼろしとなれ、
此書わか天使の眼に照されて

曙のごとく白うなりゆけ、
吹く息にそだつ爐火の如く
夕に過ぎ行く光の如く
行きて流れて遠く跡なく
やがてすごくかゞやく爾の目の下に
書の幾丁星となりて皆暗中に去れよかし。

八

嗚呼人何を爲すも人何を語るも
其靈天馬の翼に飛ぶも
昆蟲と等しく地上に這ふも、
微かにひかるゲッセマネよ、人は常に
人は常に爾のさびしき洞窟に到らむ。
あゝつらき怪しき悽愴の巖、
靈魂と運命との爭ふ處、
慘憺たる造化の幽淵の戸口、
慾情の獸近より臨みて震ふ處、
更にあやしきすさまじき『憂』の

悄然として髪を亂して入る處。
あゝ墜落よ、隱退よ、幽谷の門よ、
ゆく〳〵我生の窮まり盡くる處、
歳月の泥に印せる吾人の歩止まる處、
禍ことに重うして松柏のうれひ悲む處、
陰影陽光相まじりて天使の驚き震ふ處。
吾人はつねに此幽居に來り、
こゝに思にたへず悄として曰はず。

あゝ逝ける者安かれよ、眠れ眠れ眠れ眠れ、
しづかに形を變ふる渾沌無數の群、
眠れや野、眠れや花、眠れや墓、
眠れ人家の屋壁、墳塋の堆石、
眠れ林下落葉の堆、眠れ巣中羽毛の片、
眠れ眠れ草葉の微片、眠れおほいなる無窮の群、
しづまれあらゆる樹木あらゆる草、
しづまれ悶え湧きたつ大洋の波

しづかに聲なき死者の沈默、
莊嚴神聖なる敬神の畏、皆悉く休へよ、
恐るべき疑、おほいなる不信の暗、
おそろしき沈默幽微のもの、
自然中心、周圍、内外、
一切の渾沌、上帝の幽獨皆、悉く靜かなれよ。
あゝ霧深き呼吸に走る塵界の民、
あゝ原上を走るものすごき歩、しづまれよ。
眠れ爾泣くもの、眠れ爾傷つけるもの、
『憂』よ、『憂』よ、『憂』よ、爾の聖き眼を閉ざせ、
あらゆるもの宗教なり、侮慢のもの一もあることなし。
あらゆる生物のうへ、あらゆる受造のうへ、
あらゆる善惡禍福のうへ、
やさしき、はげしき、うるはしき、いやしきすべての上、
見よ、おほいなる天の平和の四方より降るを。
あゝ眠れる地獄は天堂を夢みるよ、
流よ、海よ風よ魂よ皆ことごとく靜なれ、

見よ、今上帝の前山嶽の上
絶崖の側にたちて星と人間と
天上の萬軍と暗空の彗星と
あらゆる渾沌とあらゆる萬有との現はるゝを見る處。
暗に呟き感に醉ひ、
無限の大空に天象の畫かるゝを見て
傷み惱める、さはれ、思は澄める冥想の人
鋼鐵の壁上に人生の問題をしるし
怪奇渾沌のたゞなかに曉を見んとして
震ひて茫洋の深崖にたち、
かけり飛び行く白鳥の目を追ひ
慘として光と色と曙とに伴はれ
暗影うづまく幽谷のほのかに現はれいづるを見る。

（一千八百五十五年十一月二日ゲルンセイの謫居に於て）

（註）一千八百四十三年二月十五日ユーゴーの長女レチポルディン其戀人シャル・ワッケリイに嫁して平和幸福の生を送りしが同年九月四日過ちて夫妻共にセイヌ

河に溺死しぬ。
本篇中爾等二人等の句は此夫妻を指す也。

東海遊子吟

あけぼの

金鶏(けい)あしたの消息寄せて
ひんがしたなびく紫雲の粧(よそほ)ひ
天風無限の愛より吹きて
あゝ今世界は新に生る。

恒星惑星胎より出でゝ
虚空の途踏むこの日のあした、
たたずや、天地の正氣を吸ひて
行くべきわが道無窮のあなた。

松島

仙府むかしのあこがれを

傳へてこゝに二千年
東海の上扶桑の端
並びて呼びあふ八百の島。

あすは萬里の外の旅
故園なごりの姿をと
誘ふは有情の波の聲、
起ちて、落つる日雲染めて
海黄金を溶す時
大高森の頂に。

頂高く今も見る
眞なるもの美なるもの
おほいなるもの常に新
左太平洋の波
散るは奔馬の狂か、
右や一灣松島の

沈靜さながら夢に似て。
あゝ色ありておほいなる
生ける詩何をかたどるや
彼人生の活働を、
是心境の平和を。

＊松島の四大觀とは富山、扇谿、多門山及び大高森を指す、そが中にも秀でて特に夕暮天地の大觀を極むるは大高森なり、こゝに上らでは眞に松島を見たりと曰ふべからず、この勝地に遊ばんとする人々の注意に特に斯く。

亞細亞大陸回顧の歌

天上玉京の星の文

靈の有象に凝る姿、
染めし黄金の筆のしづく
拂ひて銀河の波捲ける
詩神いま世に愛の羽に
おりていづくに潜めるや、
崑崙の嶺あけぼのゝ
花を喞みて露に醉ふ
仙鶴あらたに羽をのして
求めん扶桑東海の
郷――離れきて八千里、
夢魂夜毎に歸り來る
滄溟はるかに見返せば
極浦互に空遠く、
亞拉比亞の海あら波の
山より高く起つところ、
紅海の夕花のごと、
あらしに魚の飛ぶところ、

過ぎて蘇士の長江の水
舳艫喞んで舟百千
帆檣林の立つを見る
埠頭をこゝにのちにして
亞細亞の空に別るゝよ。

西シリアの漠のはて。
東扶桑の日の光、
南コモリンの燃ゆる海、
北ベーリングの凍る波、
包みて方里二千萬、
大瀑千仞の崖落ちて、
千流萬波を開くごとく、
曙光の一線東に照りて、
天地姿をかふるごとく、
こゝに人類その生はじめ、
こゝに邦國そのもと起し、

こゝに文明その端開く、
おほいなるかな亞細亞の土、
その空その陸今なごり——
時か暮天の汐滿ちて
白帆高く高はらみ
鐵輪波をつんざきて
今地中海に入る處、
船欄しづかに身をもたせ
見れば夕の色染むる
雲は幾團羽かろく
思をこめてたゆたひつ、
眸(ひとみ)を右に轉ずれば
青綠かすかに點じ得て、
黃砂の遠く天に入る
地は阿非利加の大漠か、
のちは綠の光濃く
千水萬波うねり布き

嵐も青き歐の天。
三大陸を前に後に
海は萬古の聲どよみ
一水一波ことぐく
歷史の色に染むところ、
古今の潮鳴りひゞき
東西二洋文明の
流の混じよるところ、
東海の遊子まのあたり
眺めておもひ無からむや、
行雲しばらくたゆたひて
いま塵界の子に語れ、
長風海濤無絃の琴に
不敏の子にいま思を寄せよ。
天地剖判の夢はるか

人類こゝに生をうけ
時移りゆく數千劫
中央亞細亞の山河のほとり
原人こゝに半裸のすがた、
泉地胎を溢れいで
流れを四方に引くごとく、
其水に沿ひ草を逐ふ
筋骨鐵より猶堅く、
長槍大弓身に帶びて
幕を收めて牧を驅る
百千の群やすらひの
青林ゆふべ月落ちて
篝火の光沈むとき
聞くは猛獸夜半の叫び。
曙光ふたゝびほのめけば
露を拂つてたちあがる、

連山ひとみを遮りて
たゞ青雲の遠き見る
轉々の旅幾千里、
東印度の大沃土
西紅海の岸の波、
部落おの〳〵居を定め
炊烟霞みて森淡く
雞犬あしたの風に鳴き
牛羊夕の野に群れて、
花の砂漠に點ずるに
似しや民また處々の春。
世は過ぎうつる數千載、
海洋ことぐく途となり
輕舟飛んで葉の如く、
風暖かに波ぬるむ
南歐の岸花咲きて

春は次第に巡りゆく。
更に東の運命を
思ふ百代よゝのあと、
あらし叫んで雲黑く
運命の神怒の矢
雨よりしげく降らすに似しや、
鐵騎は黑龍の水渡り
旌旗は烏拉留の雲拂ひ、
雄圖四海を掩ふべく
歐亞の山河ゆるがせし
*汗中の汗*後いかに、
かれには簒火天を燒く
十萬の軍波のごと、
大都守りを失ひて
城壘のあらし旗高く
弦月新たに照りいでし

その興廢も春の夢。
*成吉思汗
**東羅馬か滅せしトルコ

天張り雲捲き星懸る
此陸光榮に滿ちし場、
滿堂の絲竹聲やみて
客ことゞく散じ盡る
紅燈光を失ひて
暗の四方より迫る如
列邦の姿今いかに。
鳥は愁に醉うて啼く
春か十二の玉の欄
鳳笙錦曲花散りて
黃河の岸の民四億
長夜の眠さめやらず、

雪山の麓恒河の上
雲に聳ゆる三千の
金光まばゆき大伽藍、
大聖親しく法を説き
普く衆生を度せし場
山は恨を染めなして
二億の臣妾たゞ紅涙、
大陸廣く見わたせば
方里數ふる二千萬
皆凄凉の秋の風。

『天の恩寵たゞこゝに
文明獨り我の權、
あらし枯葉を捲く如く
異邦異色の民族を
脚下に踏んで白人の
惠四海に及ばん』と

歐の中原呼ぶは誰ぞ、*
教をかりて禍の
種を四海に播かんずる
私慾の權化威のあらび、
曰ふや膝つき首たるゝ
八億亞細亞の洲の民
來りて帝座にひれふせと。

* 獨逸皇帝ウィルヘルム二世

見るたゞひとり東海の
扶桑の山河畫の如く
天地の正氣凝るところ
神武神聖のわが皇祖
基をおきて二千載、
桃源の夢長うして
さめてあけぼの波清く
萬邦の潮よる處、

誰が呼びそめし君子國、
時なるかなおほいなる
運命なんぢの手を待てり、
あした櫻のくれなゐの
露を薔薇の花に添へ、
明鏡互に相照し
寶珠こもごも相含む
東西ふたつ文明の
光をこゝにまじへ來て
民ことごとく生ける詩と
普天のもとに立つはいつ。

おほいなる世の魂の聲
返響遠く東より
西より北より南より
森風吹きわたる大東の海、
千萬の流むらさきの

嶺のあなたの花を帶び、
注ぎて微妙の樂湧きて
曲はあはんか愛の歌、
其とこしへの望より
こゝに一絃胸の琴
拙きしらべ君許せ。

脚下に轟く波遠く
思を扶桑の空にはこべ、
風また吹きて八千里
わが聲はるか故山の友に
寄せよ湘南夏の夕、
靈火の焰身を燒きて
聲九皐に絕たざりし
白鶴汀に病むところ、
晃山の麓花謝して
風に臨んで才人の

しづかに春を忍ぶ處、
東臺のもと漣漪の水
湖亭のゆふべ手を握る
友また二人交の
道秋蘭のかんばしく
花よりにほふともしびの
もとに斯文を說くところ——
行きてわが聲遠く寄せよ。

＊高山樗牛
＊＊笹川臨風

あゝ今行雲何の情
搖曳の影何の思、
行雲なんぢに思を托す、
行雲去りてわれ言葉なく
船またしばらくも留らず、
帆は飄蓬の風はらみ
汽笛は長く波に呼び
黑烟空にたなびきて
亞細亞の大陸あゝさらば別れむ。

（明治卅四年七月）

瑞士

『アルペンホルン』の返響高く
嶺より夕に呼び來るところ
綠の草踏む身がるの牧兒
牛羊うちふる鈴のね添へて
あゝ聞け彼等は自由を歌ふ。

オーベルランドの氷河のなごり
谿間にしづくの集るところ
流のしみづを掬みとる織婦

岸のへほゝゑむ野花を戀ひて
あゝ聞け彼等は共和を歌ふ。

ラインの大瀑あらしを捲みて
虹霓夕にかゞやくところ
耕耘終りて歸れる農夫
紫雲に消え行く高ねに呼んで
あゝ聞け彼等は祖國を歌ふ。

佛蘭西

城下の盟の耻辱に泣きて
戰後の經營日夜にやまず
巨萬の黃金期ならず積みて
姦雄悔ありラインのあなた
あゝ民耻知るセイヌの岸に。

*ビスマルク

友愛平等自由の三語
刻める樓上三いろの國旗
回復一念焰と燃えて
アルサス、ロレインの名をみな口に
あゝ民勇ありセイヌの岸に。

シヤンゼリゼイのへ夕にたちて
凱旋門上入る日をのぞみ
偉人の不朽のほまれを戀ひて
思を金馬の姿にやるか
あゝ民情ありセイヌの岸に。

（明治三十六年秋）

* * * * * *

土耳其

アドリヤノープル弦月落ちて
鐘聲悲む「ソフィヤ」の大寺
歐土の病夫よ虎狼の慾の
飽かざる大敵いかにか拒ぐ。

宦官はびこる不盡の禍害
私營む權家のあらび
朋黨こもゝ其利に就きて
帝國日に日に衰へ行くを。

病は膏肓癒すに術なく
ソリマン、オスマンむかしのほこり
新月しるしの旗色さめて
あゝ今沈むか亡びに暗に。

日本の女性

操は嚴冬雪ふるなかに
ほゝゑむ寒梅にほひやたぐふ、
ほまれは千尋暗なる谷に
潜める幽蘭かほりに似るか、
いさをは蒼溟波捲く淵に
輝く白玉光といづれ。

嗚呼君、見えざる無上のいさを
嗚呼君、聞えぬ至高のほまれ
嗚呼君、知れざる究竟の操、
大なる國民、君よりおこる、
涙になさけに操に愛に
嗚呼君、やさしき女性の力。

ブルヂエ湖畔月夜の曲

（南フランスの一名勝、こゝを背景としてラマルテーンの名歌あり「湖」と題す）

歌やいづこ
たゞ蓮にあらはれて
木蔭にひそむ
夕風の聲。

戀やいかに
大空高くすみのぼる
月たゞ照す
たへぬ思を。

さらば漕ぎ行け
一葉の小舟
むかしの城のあとのこる、

あなたの岸の片すみに
暗き聲ある片すみに。

探りて得たる何の曲
夜目にもしるくアルペンの
雪の頂てりわたる、
月はしづかに山のはに
思の光おさめしを。

こぎ歸れ
こぎ返せ
人はむなし汀上のあけぼの
戀はふりぬ古城の殘月。

歌やいづこ
さざなみ今は收りて
あけぼのゝ岸

風遂にさめず。

戀やいかに
ほの〳〵しらむ月かげに
さむるは遠き
あけぼの〻鐘。

アルノー

（伊太利名市フロレーンスを貫流し古來文藝の上に名高し）

あゝアルノーの夕の水
夕日の光にほへども
詩人の春ぞ夢遠き、
むかしの戀をさゝやきし
なごりいづれの蓮ぞ、
あゝビアンカ歌へ歌へ

歌は猶身に
聲は猶世に。

あゝアルノーの夕の水
夕日の光さめはてぬ、
花のちよろづ香を吹きて
春ことゞく色なりし
世はとこしへにかへらじか
あゝビアンカ歌へ歌へ
曲はなほ春
樂はなほ花。

あゝアルノーの夕の水
霞みどりの遠山の
思の雲は今いづれ、
蘭の漿そはひんがしの
ふるきむかしの歌がたり、

あゝピアンカ歌へ歌へ
水どよむまで
風答ふまで。

あゝアルノーの夕の水
行きて歸らぬ水のごと
あすは我行くみんなみの
千歳の都苔青き
石に歌あるよその岸、
あゝピアンカ歌へ歌へ
星ねむる迄
月しづむ迄

＊ダンテ
＊＊ルネッサンス
＊＊＊ローマ

＊
＊
＊
＊

フローレンスの遠望

雲今西に收りて
天半たゞよふ黄金の波の
最後の光消えがてに
ポプラ綠の森わけて
はるかに見ゆる萬家の府。

『カステロ、エッキョ』の鐘樓高く
大寺の圓蓋夕に殘る、
嗚呼美なるかなフローレンス
煩悶煩惱の人の世に
ひとり自然のふところに
ほゝゑみ育つ天の寵兒、
天地はこゝに靈にして
烟るが如き丘のもと

花あり、香ありたくみあり、
戀あり、歌あり、情ありて
『*完きもの』をこゝに見る、
見よ生命の水のごとく
白練の如く光の如く
綠の谷を貫きて
アルノーの流うねり行くを、
そのアルノーの水遠く
我また明日は雲水の
行方定めぬ旅の空、
迷の子等の惱ある
胸にとこしへ行き通へ、
神韻つねにいにしへの
朽ちせぬ花に色に香に
なごりに宿るアルノーの岸。

*「完し」とはフローレンスの調也（テインヌ）

セイヌ江上の別離

人

秋十月のセイヌ河
黃ばむは岸のプラターヌ
愁も淸きさゞなみに
旅の姿を照らし見よ。

關山夢は遙かなる
高樓のむかし春のゆふべ
夕日彩どるくれなひの
光慕ひしおもかげは
いたくも秋に瘦せつるよ。

哲人學びのよはの窓
ともしの油つくるとも

聲に玲瓏の光湧きて
照すは宇宙の眞善美、
心兵そゞろに空を馳せ
冥茫の極進み行きて
祕密の門を探るごと、
自然の招辭みあへず
あした叢雲かきくもり
夕薄霧野をこむる
道はた道のはてしれず、
歐亞の山河こしかたを
夢より淡く眺むれば
時に弦月の影くれて
古城のあとに餌をあさる
猛獅の聲に夢破れ、
時に銀河の千仞の
末落しくる大瀧の
なごりの水も掬びしか。

十二の大路不夜の鄕
花より匂ふともしびの
光に旅の影寒う、
錦城の歌吹春たけて
輕羅の粧たが戀の
紅染めしおもかげに
忍ぶは故山の花の色、
藝園はたまた春遠み
盡きせぬ自然のあと追ひて
あゝまた立たむ旅ごろも、
秋やセイヌの水おもに
さらばしばしの影と影。

東の人

ナイルの岸の遠きより
四千餘年のいにしへの
おもかげ傳ふ石の碑

移りてこゝにたつ處、
きのふは『戰慄の世』の狂ひ
斷頭臺のよるに日に
血汐を吐きし『コンコルド』
今滿城の子女群れて
秋なほ春か逍遙の
姿たのしき夕の色、
大都背きて君さらば
あはは葡萄の紫の
南あなたのマルセイユ、
むかし軍鼓の轟きに
壯士髮たつ世の亂れ
急雨忽ち襲ひ來て
落葉あらしに散るごとく
どよみおこりし民の歌
歌はゞ血汐なほ燃えむ。

四の人

輕隼あらく羽たゝきて
綠の雲をとびしのぎ
萬仞の嶺雪の嶺
嶺より高く冲いるべく
天日の影慕ふごと
是より遠くみんなみの
山河はるかに君行くか、
*ユングフラウの雪白く
*アールホルンの雲黑く、
おほいなる靈手を擧げて
刧初の空の暗こもる
千丈の谷底深く、
氷河の途をつんざきつ、
絕崖のあらし聲高く
今なほ彼の呼ぶ處
君はた歌のなからめや。

*アルプス山中の高峰

東の人

波は銀馬の空を蹴て
あらしに呼ぶに似たらむか
百代の興亡跡洗ふ
秋おほいなる地中海
渡らむ後の旅いづれ。

西の人

暮雲聲なく紅の
色のかすかに薄れ行く
一片風にまかせては
行方定めぬわが旅路、
四たび赤道の寰を越し
十字の星の影高き
南極の光仰ぎ見て

芭蕉の森のよるの露に
乾く唇濕しつ、
夜半のあらしうづまけば
大漠の夢驚きて
空に啾々の聲聞きぬ。

さらばゴシェンの牧の長
旭日にうたふメムノンの
岸をのがれし導きに
夜は紅血のともしびか
晝白雲のまるばしら、
そのあと追る千兵萬騎
怒潮の狂ふさかまきに
鯨鯢の餌と失せはてし
紅海の水過ぎ渡り
ハーラ、シナイの嶺また嶺
白雲永く住む處

行く〳〵遠く顧みる
烟波そゞろに秋深く
空明高く星澄みて
潮は長し三千里、
大聖の教衰へて
民に久しく命なく
直立二萬九千尺
ヒマラヤの嶺霧深き
亡國のあとわれ訪はむ。

＊＊モーゼス

東の人

尼連禪河の春の波
あけぼの清く澄むところ
そらに悟の星照りて
至聖しづかに微笑みつ、
五天焰の雲燒きて

破邪のつるぎの拔けしより
花咲き花ちる二千歳
東亞の邦の衰を
何の咎とやあげつらふ。

おさなき鳥の巣立ちして
つねに梢を思ふごと
心は東海の波のあなた
隣邦今も夜長く
鴨頭の綠漢の水
溶々のあととまらねど
民に久しく聲たゆる
煩悶の姿たが責ぞ、
十二帝陵露深き
銅駝の脊に身を寄せよ
秦關百二やぶれては
たれか洛陽のあとを訪ふ。

瀛州のあと猶あなた、
花は萬朶の春霞
旭日ににほふ朝櫻、
暮は金光てり殘る
八百の島松の島、
自然の惠おほいなる
鄕試みに君よ訪へ、
甲東一たび逝きてより
秀麗の山河人はなく
今群小の咆哮に
一世の光暗くとも
祖國いつかはいましめの
いさめの聲を聞かざらむ、
陋習ながく破り乘て
廣く世界に知を求む
おほいなる聲彼にあり、
維新の風雲暗を吹く

曙の聲消え果てじ。

四の人

東亞の光四手載
瀛西の華二千載、
華を光を集め來て
時運のあとを育つべき
おほいなる哉邦の命
享くるに堪ふる民いづれ
そのこしかたの世々のあと
花は光は歌は世は
詩人の戀はむかしなる
アルノウの水君去らば
南あなたの大都
雲に思のあこがるゝ
夕の空に乞ふ歌へ、
纏へる蔓は絃にして

敗墟今はた琴ならむ。

*ダンテ　**ローマ

二人

雲亂れ散り亂れ飛び
水流れ去り流れ來る
離合か集散か世の姿
よし葉は黄ばみ落ちぬとも
同じ一樹の蔭にして
こゝに葡萄香の高き

セイヌの秋の水おもに
並ぶる影のたゞしばし、
ゆふべ今はた色染むる
シヤンゼリゼイの空のあなた
凱旋門の影暮れて
見よ鐵橋の四の隅
石柱高き金馬の姿

燦爛の光落つる日を
返して高き雄々しさや、
留むるも遂に留まらぬ
自由の風に羽たゝきて
天にかけなむ心の影か、
影かあゝさては行末の
雨もあらしも光見る
望に堪へむ世々の旅。

（明治卅五年秋）

*ブラースド、ラ、コンコルドに埃及より移し來れる角尖塔起つ、塔はラメセス大王の功蹟を錄せるものとぞ此廣場はセイヌ河に添ひ『コンコルド』橋を隔てゝ衆議院と對し、東は『チユーレリイ』西はシヤンゼリゼイに接する革命時代に斷頭臺のたちしはこゝ也。

タオルミナ希臘劇場

（南歐シシリイ島の南岸にあり全歐藝術家憧憬の的なり）

破壁むなしく夕に残る、
残りて曰はず時いづれ、
流光遠く東より
潮を染めて一千里、
*金羊毛を探し行きし
比か嗚呼かれ詩美の民**
輕舟ひとたび身をよせて
深紅そめなす落日したひ
濃藍ひたせる水こぎわかち——
流るゝ花に入る月に
銀海春を夢み來て
水にこがるゝ白鷗の
つかれし羽をたゝむ如、

汀上こゝに帆を卷きて
この風濤の樂を聞き
この藍光の空に醉ひ
かの清泉の淵に掬み
かの金色の菓を摘みて
紫雲たなびくオリンピア
故山はるかに一万の
春を移しつゝあとかたか。

*所謂「アルゴノウト」の一隊 **グリイス國民

破壁むなしく夕に残る、
名工苦心のあととむる
劇場こゝに築かれて——
雷を呼び雲に乘り
『アムブロシヤ』の香ふりみだす
十二主神のそのかしら——
あらしをおこし波に驅け

三叉の戟に威を奮ふ
海神(三)――あるは無縫の天衣
解きて金甲身を鎧ひ
雲鬢高くつかね巻きて
明眸さながら綠の星か
光か智惠の權化の女神
または紅頰の百の媚
といきは春風の香と化して
萬花の笑を咲かしむる、
美なる愛なるアフロデティ――(四)
こゝに顧みならびしや。

(一) ヤユピタア　(二) ネプチユーン
(三) ミネルバ　(四) ギイナス

破壁むなしく夕にのこる、
こゝに桂葉の綠の冠
他の*ピンダアに歌はれし

人、わざ、ほまれ、いくそたび、
それや、假想の夢にして
霞にしづむ雁がねの
途に譬へんまぼろしか、
破壁むなしく夕にたちて
ただ曰ふ「かの民おほいなりき」と。

* 希臘叙情詩の大家

春花秋月光を香を
灑ぎし撒きし世々の跡、
南浦碧の草枯れて
花に百年の齢無く
響心圓く照し來し
月は碧海にしづみ入りて
時の嫉みか虐か
惠か殘る穹窿の
崩れしあとに獨りたてば――

時しもゆふべ紺青の
空、南歐の夏の空
寫す鏡は濃藍の
ひかりイオニヤ海の水、
烟波、思に堪へずして
風濤はるかに呼び行くは
是より南、縹緲の
紅沙の岸の亞非利加か
近くは白銀のへりをとる
長汀曲浦の一灣のゆふべ。
その激灩の岸より起り
ゆるくゆるく遂に遠く
暮雲の冠にくれ殘る
『天の圓柱白雪の保姆』
絃歌の始祖の讃ずるところ
エトナの高嶺九千尺

焰をおさめ火をつゝみ
丘陵しづかに見おろして
佇み立てり、おほいなる
靈の思想の翼疾く
ひとり群小の世の外に
高くはれて飛ぶ姿。

＊ピンダア

カムパニアの大野

（羅馬郊外、史上に著名、水道の跡猶殘る）

綠は遠く遠く布きて
限るみなみのアルバノウ
蒼烟しづかに夕をこめて
見よ今、羅馬の落日は
聖徒の名をよぶ寺塔のあなた

入りて餘光は遠くこゝに
射るクロチオの大水道。

これやいにしへ帝國の
百萬の富、威光のなごり
蜿蜒長蛇の這ふ如く
蒼茫の野に暮れ迷ひ
綠蘿をかしらに又胸に
樂を無聲にかなでいて
似たり巡禮の群幾千
もすそを長う杖により
罪に苦み暗に泣き
ひきゐて聖壇の地に行くに。

その長壁のもとくゞる
車を驢馬に任せさりて
上に睡のたけなはの

農夫の夢はいづくぞや、
あなたチボリの丘の上
葡萄の酒の紅の
壺の重きを載ける
村のをとめのほゝゑみか。

迷へる群にあらなくに
また見よ夕ひきかへる
姿さびしき牧の子ら
大都の花に色に香に
時の潮に遠ざかり、
雲はあしたの雨帶びて
歸る東のアペナイン
麓に終へむ運命の
姿さびしき牧の子ら
鞭を鳴して口ずさむ
歌は何等の鄕音か。

それや人生、これにまた
興廢いくたび夢殘す
嗚呼綠なるカムパニヤ、
東海はるかに波浪をわけし
客衣の袖をなんぢの空に
かへす遊子の無窮の思、——
四海の水皆連りて
六合の光相まじる
人文の流ふみわけて
とへば東亞のいにしへの
波瀾こゝにもひく潮。

秋風吹きて雲迷ひ
草木落ちて雁歸る
むかし汾上のくれの水、
錦纜牙檣波に照りて
簫鼓のひゞき風に散る

その清興の極まりに
遂に人間の世を泣きし
茂陵*の劉郎かれまた一時、
ひとたび立ちて手をあげて
十萬の漢騎漠の北、
王庭これより跡絶えて
胡天の月に遠ざかる
蠻族走りて歐の西。

* 漢の武帝

大化の時運たゆみなく
萬波互に相答へ
風雲しだいに相呼びて
春秋こゝに四百年、
今カスピアの波狂ひ
今黑海の汐亂れ
群蝗天を暗うして

ファラオの邦に入る如く、
諸蠻つゞきてむらがりて
ドナウの險も支へ得ず、
曙光新たに春なりし
七丘の基なりてより
凱旋三百集め來し
天下の富の禍か、
羅馬なんぢの天領は
煙塵火焔のひまとめて
かけ散る千軍萬馬のひゞき。

基督世紀第二十
悠久の天地またこゝに
東西の潮相まじり
あしたバルカンの雲あれて
ゆふべ朔漠の風狂ふ、
北夷のあらびまた增すと

故山きのふのおとづれに
また傷心の遊子の身、
盛衰存亡一場の
夢帝國のあとかたか
愁に萠ゆる青草の
大野にひとりたち盡す
影今さらば消えしめよ、
霧と烟と思とに
あゝ今暮れ行くカムパニヤ。
（明治三十六年五月日露の風雲急なる時）

司馬子長名山藏書歌

凡百三十篇、五十二萬六千五百字、略以拾遺補藝、
成一家之言、厥協六經異傳、整齊百家雜語、藏之名
山、副在京師、俟後世聖人君子

史記自序

青冥高く貫きて
翠を染むる崖千仞、
鬼斧何の世につんざきて
こゝに中天の鎖おく、
雲か凝りなす星斗のしづく
香は九霄にうづまきて
降りて搖曳の嶺の春
虹霓の明滅時ありて
見るか天地の大文章、
さらば靈山宿るを許せ
一生の心血灑ぎなす
百三十年の篇の數、
天馬の雲を飛ぶに似て
風霜の氣を挾む
鳥跡すべて五十萬
待つは千載の世の定評
清鑑終にあやまたず

月天心にかがやきて
江流花の影綏く
洋々の樂湧きあふれ
斯文の春のにほふとき、
其後の世を遠くまつ
思をなんぢ憐まば、
鳳簫あしたに呼ぶところ
玉英ゆふべに咲くところ
宿せ靈山わが此文。

風吹き雲とび鳥かける
千山はるかに見おろせば
浮沈は永く世に絕えず
悲歡こもごもあと換へて
群生悉く悶えざる
人寰なにとてかくはひくき。

紛々たる哉浮世の争
功名富貴の樂(たのしみ)いかに
金冕珠冠の誇はなぞや
一瞬忽ち消え行く雲か
鳥道跡なきむなしき空(そら)か、
天地いかなれば獨り永く
この悠々の春に嘯く。

あゝ今落日思をこめて
遠く彩雲の中に入る、
むかし龍門に生を受け
河山の陽に耕して
牧笛ときに春に呼び
半ば黄牛の脊に寢ねて
落花の風に拂はれし
無心のあとを忍ぶべく。

十歳はじめて古文を習ひ
三墳五典深きを探り
八索(さくさく)九丘遠きをたづね
夜々親しむ孤燈のかげに
隈なく照しゝ古人の心、
筆は造化を補ひて
名は千秋にかんばしき
あと羨みしそれはたむかし。

『獲麟このかた四百年
紛々の世の亂れより
久しく絶えし史書の文
大漢起りて世はまたひとつ
俯めて後に傳ふべき
論著の望はたし得ず
九泉はるかに沈み去らば
繼ぐを忘れそわが此任』

先人いまはの血に泣く思
泰山おもき遺託のことば
夢寐しばらくも忘られず。

しばらく龍門の郷をさりて
南江淮に客衣の露、
青黛ならんで笑みを含む
九疑の嶺を眺めさりて
更に皇英のあととへば
騒人の怨また添へて
清し沅湘の秋の波。

青嵐ふたゝび袖を拂うて
北に汶洒の水渡り、
絃歌のひゞき猶傳ふ
魯に先聖のあと仰ぎ、
齊梁の野にさすらひて

燕趙の士と手を握り、
達觀まことに難しとも
あまねく窮めし道また道、

旅また思ふ遺託のことは
『繼ぐを忘れぞ、わが此任』
それかあらしの夜の聲か
吹いて西窓のあかつきに
風樹の恨み星淡く。

太史ひとたびあとをつぎ
不肖の材をいましめて
夜を日につぎし至誠のつとめ
室家の業も忘られて
交遊はたまた棄てゝしを
命そも何等の天の意ぞ、
壯士の寃を悲みて

天下のために訴へし
救の聲は罪なりと、
讒誣は劒の双の如く
明月雲に蔽はれて
われ蠶室のはづかしめ。

囹圄の暗に思ひやれば
凉秋九月草枯るゝ
かれ朔漠の夜半の夢、
胡笛咽んで霜によび
風沙碎けし骨散りて
穹廬の天をあふところ、
たゞ影をとひ名を嘆ぐ
將軍はたまた何の思ひ、
比すれば泰山なほ輕く
時に鴻毛なほ重き
一死のあとをあげつろひ

說かんは難しや俗士の前。
沉淪すぎさる五十年
天下の笑と身をなして
醜辱悉く我に足る、
父母を顧み妻子を思ひ
生を貪り死を憎む
情また天の貸すところ
たゞ理に激し身を忘る
丈夫の思たれかはしらむ、
轉ずべからず石ならず
一念先人の靈に觸れ
石室金匱くまなくすべて
讀み破りたる書萬卷、
曉鷄いねざる耳にきき
殘燈あしたの光に消え
始をわきまへ終をたづね

缺けしを補ひ遺ちしを拾ひ
百家の言を整へて
跡統べ了る二千載。

先人の魂ほゝゑみて
照し臨まむいま子の功
厄にくるしみ世になやみ
思を傳へ後に垂る
列世の賢者うなづきて
神交われに許すやいかに、
周公亡びて五百年
魯聖の光世にてりぬ
宣尼亡びて四百年
天下今見る何の書ぞ。

六經遠くあとをつぐ
百三十篇の數、

永く一家の言を成す
鳥跡すべて五十萬、
巴人の歌にならはねば
待つは千載の世のさだめ
朱殿瑤臺春の夢
天地の間眺むれば
ひとり峻崖絶嶺のうち
歳むべからむこれこの文。

見よ今落日雲に入りて
遠く人界を逃れさる、
われ跡おはむ遠からじ、
一生の心血そゝぎなして
名山ひとりわが知を求め
永く清凉の風に駕して
塵外の氣に嘯かむ、いざ。

懐郷

夢に暮山のくれなゐの
雲のへ共にやすらひつ、
君が手とりて霞こむる
下界の春を見おろせば、
折しも東そらにほふ
月は一團の戀の靈、
あらしを拂ひ霧を吹き
わだつみ遠く澄みわたる
潮の歌に調添へ、
人の世永く春なれと
歌ふと見つるまぼろしや。
月は下界の春戀ひて
おぼろの夜半に袖かざし

海は磯邊のさゆり花
かほりにつねにあこがれて
あさな夕なの愛の歌
知るや銀河の夜をこめて
白むは恨、遠きあなた
見えぬ大虚のすみに倚る
緣の星を思へばぞ。

その趣のいみじさは
つめたき路の石も知る、
荒鷲高く天かけり
たけき翼に雲をさく
その戰のをゝしさも、
嘆かむわれに戀なしと、
問はむみどりの苔つゝむ
古墳の夜半の聲いかに、
こゝにそゝぎし戀人の

涙は天に乾かじを。

春やセイヌのさゞなみに
たそ影てらす都人、
半ばは傘に影つゝむ
雲錦裳の粧ひや、
岸はみどりのわかめ吹く
世にはるかぜの愛絶えじ、
水は流れて西の海
西の海はた波かよふ
潮導きひんがしの
扶桑の空に赴かば
思傳へよ人の子に。

故郷今花のしら雲か
姿ぞうかぶ青葉山
麓のみどり廣瀬河

花のおもかげやどしては
波はた何の歌ありや、
人の子思くるゝとき
夕の岸にひとりたち
此春いとゞ朧よと
嘆かば月も泣くべきを。

こゝにも咽ぶ旅の子の
夜半の思は君ぞしる
ゐろりのまとゐ友さりて
灰やゝ深くつもる時
獨り向ふはたが姿、
寫繪聲はあらずとも
うちもる我目みらるゝ目
等しく涙湛へぬと
見るは迷かまた問はじ。

夜半に更け行くソルボヌの
鐘數へしもいくたびか、
時に惱みてくれなるの
血汐を吐きし夢ありと
知るや知らずや世捨人、
たゞ夕ぐれの風のねに
思は通ふ雲の路、
君はた我を思へりの
その慰にほゝゑまむ。

拙きしらべ厭はずば
受けよ齋けよ『戀の宮』
潮路は遠し一萬里、
波はた燃ゆるくれなるの
海よりすゝむ文の旅、
菩提の林なごりの葉
緣を染むるわだつみの

あなた東のふるさとや、
光の翼誘ひ行け
暗の路また開かれよ、
舞ふ白鷗の羽のうへ
にほふ春雲の裳のうへ
ゆけやわが歌遠く遠く。

＊ペトラルカの句『愛人の心は戀の宮也』
（明治三十六年）

『ノートルダム』

あゝ悽愴の目を擧げて
見ずや無月の暗にたつ
『ノートルダム』の塔二つ、
『沈默』こゝに聲ありて
幽冥の世より遠く吹く

あらし夜半に何の歌。
霜に星象の色冴えて
高し天狼のまたゝく火、
みどりは萬古何の世に
震ひ初めし光ぞや、
巨塔しづかにうなづきて
語るかわかき九百年。

あゝおほいなる暗と空、
神祕のうちにたゝずめる
人はた何の靈ぞ、曰へ
有限無限の別絶え
有象無象の聲まじる
『ノートルダム』の夜半の塔。

＊　＊　＊　＊　＊

『ミロのヴィーナス』

所謂『ミロのヴィーナス』は一千八百二十年希臘多島海の端ミロの島にてある農夫に發見せられしものなり、學者の考證に據るにとは紀元前四世紀頃プラキシテレス及びスコパスの派と同時代の作なりとぞ唯に美婦人のみならず、猶また女神としてアフロデテイを表はしし希臘の彫刻中殘りて今日に現存するは獨り是あるのみ。端嚴にして力あり然かも猶いふべからざる青春美妙の趣を含みて其面貌のけだけさは全く人界の慾を離れて悠悠自ら足ることを示す。今『ルーブル館』に收めて其最貴なる珍寶の一とす。

（リユーブケ及び其他）

立つは何等の靈の化か、
紅重く春深く
花魂ゆふべに暮れ迷ふ
玉樓の歌凝りなさば
取らむ有象のあと是か。
端嚴微妙のおもかげに
浮世も塵も影とめず、
たとへば深く測りなく
藍を湛ふる波のへに
銀輪かげを照すごと、
嗚呼石何の靈ありて
刻むを見るかアフロデテイ。

あゝあゝ高し理想の美
これやアゼンの肩廣き
聖者に見えし幻か、
イヽダの嶺に爭ひて

勝ちし報に牧の子に
邪淫許せしそれならず、
曙の光に照さるゝ
薔薇色染む頰の色
花よりにほふ獵の兒に
あこがれ戀ひしそれならず、
力なる息貝を吹き
羽ある姿魚にのる
わだつみの子の群の中、
春南歐のあさぼらけ
潮の華のうたかたに
生りしと傳ふそれならず、
これや五濁の世に遠く
澄める匂へる若やげる
尊き黑き理想の美——

仰げば心遠く遠く

神祕の息に吹かれ行きて
雲集る嶺に神遊ぶ
とこよの春の尙あなた、
天上の霞くれなゐの
色に聲ある愛の曲、
夢は銀漢の波に湧きて
鳳吹長く呼ぶところ、
下界ゆふべの露に泣く
幽蘭の香の昇り來て
星ことごとく笑む處。

青鸞花を啄みて
無何有の鄕にとびかける
跡を慕ふに羽たゆき
暮雲靜に聲なくて
夕の嶺に降るごと、
心再び歸り來て

みまもるいみじの石の像、
たくみ何等のたくみより
たゞ渾然の鑿の跡
刻むか天の產みなせる
高き理想のおもざしを、
嬬娥の胸のゆらぎより
八重の高潮湧き立ちて
あなたに引かれ寄る如く
吸ふか眸を石の呼吸、
石に無聲の歌ありて
語るは遠き世々のあと。

世もあけぼのゝ紫の
雲はなれゆくオリンピヤ、
十二の神のよさしより
花は不斷の春がすみ、
露か眞珠かたてがみに

散す銀馬の嘶に
聲に歌あるあさぼらけ、
緑をわけて紅を
誘ふ流れの行末の
大わだつみの狂も
三叉の戟の神鎭。

＊ネプチユーン

神と人との群れ遊ぶ
春銷魂の恨無く
肉と靈とは仇ならず、
泉はじめて巖より
溢れ湧き來る清らかの
血の脈いかに高かりし、
桂の緑檄欖の
森より仰ぐいや高き
アクロポリスの頂に

照りしは花か美か神か。
おゝ大なるアッチカの
倒れし跡の死の靜、
名匠夢のまぼろしを
觀じ刻める圓柱、
眞白き石は碎かれて
蔦に纏はれ野に埋れ、
野に春笑みて降れども
その妹見えずイリススの
聖なる谷は鳥去りぬ。

すぐれし國の姿よと
歌人傷む行く春の
曙冷えて幾千年、
遠く紅砂の原をわけ
鄰子の緑の蔭くゞり、

流れて千里大水の
ナイルの流海に入る
港再び春を見し
それはた夢の一時か、
橄欖山の夜の暗に
伏せし至聖の說ける道
其末流の濁より、
女神よ君の姿見る
無垢清淨の花の片
大路の塵と碎かれて
暗と醜とに世は泣きぬ。

時か白鷗春に舞ふ
影は藍光の波照らす
南海のうへミロの島
そのわだつみの曙の
空に虹霓の文染めて

ひゞきにけらし天の樂、
千歲埋れし美の靈の
光ふたゝび世に照りて
アフロデティの影を見し
その日とこしへ惠あれ。

南海はるか波わけて
こゝに葡萄の紫の
房かんばしき空の下、
路に薔薇は蒔かねども
民の渴仰世の歡喜
產みてセイヌの岸のうへ
あと留めしは遠からじ。
戀に恨に世を泣きて
世をあざけりて名も淸き
ラインの流渡り來し
愁の詩人、いやはての

呼吸は神よ御膚より
にほふ微妙のそよかぜに
交へんとこそ願ひしか。

東海遙か思ひやれば
鳳凰いつか飛び去りて
蕙蘭ながく怨の香、
世は粉黛の粧さへ
曉照らす鏡のへ
雲鬢ながく匂はじを、
あゝあこがるゝ世の祈、
神韻永く香を吹きて
聖美の影をとこしへに、
今藝園の花にほふ
セイヌの河の片岸に
とめよあゝ神アフロデティ。

(一)プラトン　(二)パリス　(三)アドニス

(四)アレキサンドリヤに一代の巾國哲人ハイパーシヤ基督教徒に虐殺せらる
(五)ハイネ

哀歌（弔高山樗牛）

東海はるか一萬里
故山の春にさきだちて
人は愁のおとづれを
傳ふセイヌの夕の岸、
江流思をこめながら
花は未だし流れじを、
運命何の嫉より
今はた彼に無常のあらし、
幽冥不可知の高きより
遠きに靈を吹き去るや。

逝けりや黒欄名を圍む
片紙夢とし消えさるや
逝けりや幽渺照し射る
靈火の宿り目の光
これより見るをよくせずや、
逝けりや一代野に高き
風霜秋に冴ゆる聲
是より聞くをよくせずや。

逝けりや春秋三十二、
遠く暮山の雲より湧き
閃電ゆふべの暗を射て
山河忽ち鳴りどよむ
その雷の名をとめし
かれ薄命の天の才。

逝けりや赤門首先のほまれ

逝けりや鶴城率土の誇り、
逝けりや昭代七歩の才、
織りなす文藻花より匂ひ
風雲胸にうづまきて
陶鎔さながら神なりし
あゝおほいなる天の才、
君また逝かざるべからずや、

＊彼は羽前鶴岡の人

セイヌよ流轉の世のかげと
流るゝ水を觀じ去る
東西悟りの世々の聲
今彼の上に聞くべしと
われ夢みしや、魂遠く
波に泛びて夢みしや、
無常を常に聞き馴れて
驚く耳は稀ながら

昨日はむなし明日知れず
『望はあだ』の世の聲を
われや半は笑ひしか。

セイヌよ夕暮思をこめて
暗き恨みに流れ行け、
岸に次第にくれかゝる
九百餘年の世々の夢
『ノートルダム』の塔の上、
雲いま夜のおとづれを
空のあなたに傳へ行かば
有象無象の聲まじる
あらしの宿を訪ふていへ。
『東海あなた一萬里
斯文の春の行末の
望つなぎしおほいなる
光は永く消え行く』と。

セイヌよゆふべの波深く
神女今猶ひそみなば、
漣清き琴の絃
歌は愁の音につかれ
夕暮しばし靜なる
眠に入らむ彼の前、
擧けよ其波また泣きて——
覺せ再び人の子の
悼盡きせぬ聲あげて——
歌は光は詩は樂は
靈と靈との途繋ぐ、
神女今はた聲あらば
泣かずや逝ける君が身を。
＊セイヌ江中に神女ひそむとの古傳說あり

悼むに堪へぬ天の才、
雲霓かすかに名殘の光

暮天の嶺に殘る時
落花色なき夕の水、
岸にたゝずむ旅の子が
春にあこがれ神に醉ひ
はてなき天を慕ふごと、
今銷魂の友の聲
かすかに響く後の世に
彼よりよそのおほいなる
靈はた彼を歌ふべく――
さらばしばしのわが調べ、
錦繡織りなすたくみの難き
不敏は遂に許されむ、
靈は嘉せむたゞ誠、
友と呼ばんはかしこかる
師なり靈なり光なる
君を悼みの歌いかに。

羅馬郊外にシェリーの墓を訪へる後
モンテ、テスタチョの丘に登りて

東はるかにアペナノンの峯、
彩雲ゆるくたなびきて
思を傳ふサビィンの山、
七丘しづかに春深く
人籟はたまた聖うして
霞にこもる歌は何ぞ。

聞かずや聲は落日の
名殘の影のたゞなかに、
聲は夕の風の靈
聲は靜にわれに呼ぶ
『人皆遂に逝くべし』と。

嵐の雲湧く空のをち、
荒波眠る海の底、
暗の湧き來る森の奥、
夢の生るゝ神祕の地、
運命闘ひ了れる處、
愁の極の喜なるか、
惱の了れる平和の鄕か、
星辰歌湧き盡きせぬ邦か、
銀漢波止み花咲く邦か、
蒼穹形の變れる場か、
あゝ人間の遂に知らざる、
劫空はたまた神祕を解かぬ
不測の幽淵あゝ汝、
なんぢ、此世に死と呼ぶ者よ。

迫る幻秋の露
悽慘のまみ思濃く、

白衣の長裾ひるがへし
青き花撒き星散らし
下界に下りくる彼や死か、
大なるもの美なるもの
いみじかしこきものすべて
皆悉くうち伏すか。

まぼろし去りて霞吹く
あゝ七丘の春しづか、
名殘の聲は落日の
光をかへす雲の中に、
聲はゆふべの風の靈
聲は靜にわれに呼ぶ
『人みな遂に逝くべし』と。

* * * * *

羅馬の郊外カムパニヤの『クオ、ワーデス』寺院

聖ペイタアむかしローマを逃れ出でし途中ここにキリストの靈に逢ひて再び歩を回らしローマに入りて後教に殉ぜりと傳ふ、シエンクウイッチの「クオ、ワーデス」はこゝを最後の局面となす。

その心眼のまぼろしに
大使徒至聖の影を見しや、
地上の權威の極を
示す羅馬の大城壁、
壁のあなたは血の叫び、
救世の聲は溺らされ

光は永く暗に消えて
たゞ見る暴虐非道の狂、
夜半の空にあらし泣き
あしたの風に露咽び、
赤子は高く手を擧げて
來らん奇蹟を待つに泣く、
一度逃れし猛虎の牙
さらば歸りてわが血に染めむ、
最後の慘狀いま目に泛ぶ
鐵釘四肢に喰ひ入らむ
磔刑の惱使徒のほまれ、
感謝の涙ひれふして
受けざらめやは天の命、
芥子の譬外ならず
大地わが血に肥ゆる時
花紅の色匂ふべく。

さらば綠のカムパニヤ
迷へる羊導きの
わが足なんぢにまた印さじ。
いざ行かむ罪業の都、
霹靂電光七丘をうちて
皇天の怒りに震ふ處、
いざゆかむ羅馬、
ゆかむ第二のバビロニヤ、
殉道の血今なんぢを染めむ。

今も綠のカムパニヤ
今も紅野花の匂ひ、
色に聯想のあと遠き
ヨルダンの岸橄欖の丘、
靈なる光世に照りて
ふりし天火の『パプテズマ』
偉大は常に偉大を生みて

君またこゝに殉道の
血を灑ぎたりあゝ大使徒。
それより一千九百年
血は花と咲き花は果となり
果はまた腐る自然の理法、
あゝ大使徒、君逝きて
こゝに一千九百年。

深夜

睡るが如き月の光、
夢むるに似る森の姿
たゞ水鳥の蘆間の戀を
さゝやくそれか漣の
ほのかかすかの音ありて
あゝ人遠し夜深し。

永劫の戀

花よりよその粧よと
染めしはじめの空の虹
その遠き世にその空に
戀ひし二人にあらざるや。

三千歳一たびなると聞く
そのくれなゐの桃の實を
わかちて嶺の春の夕
戀ひし二人にあらざるや。

南の極の星高き
十字の光仰ぎ見て
椰子のみどりの森かげに
戀ひし二人にあらざるや。

あゝ時うつる世々のあと
時の潮のたゞ中に
浮きもしづみも共にして
戀ひし二人にあらざるや。

『愁』

雪より眞白き透く紗の衣に
雪より眞白き膚を包み
疲れし『望』とあだなる『戀』と
幼子ふたりをやさしの胸に

かすかの吐息に夕霧わかし
思の亂に夕烟靡け
夕の雲の上しづかにかくる
あゝあゝやさしの『愁』の影や。

凱歌

渤海夜半の怒濤を蹴りて
暴露の水砦微塵に碎き
十年怨の凝りなす處
遼東ふたゝび我手に歸り
霹靂電光あらしに亂れ
陰雲碎けてうづまくきわみ
黄海ふたゝびみどりを凝らし
旭日新たにあけゆく海に
大艦艦艦むらがりすゝみ
前艦橋より凱歌の喇叭
虚空をゆすりて響くが如く——
かく嗚呼青年、なんぢの胸に
凱歌のひゞきは絶えざらむ

夜半の燈下に思をこらし
難きを破りて惑をほどき
行くべき無窮の進の一歩
おどりて前途にたゝん時。

ドナウ江上の吟

みどりに暗き『カスタニイ』
みどりは四列遠くかすみ、
夕暮群るゝ逍遙の
影と姿と織りなせる
プラタの街塵香ばしく、
双輪時に龍馬をかりて
玉顔いづれの珠樓にむかふ、
風は笑語を吹きおくり
空は歌樂のどよみ湧き

涙の泉あと絶ゆる
こゝ世は憂の谷ならず。

人生の海清愁の
たのしき境またかなた、
大都南の郭の外
地は一面の幽界の
綠樹しづかに影ふかく
曳きくる棺車おふ處、
中に劃して紅の
花か凝りなす無韻の哀歌、
あゝこれ恒星互に歌ひ
山川こもゞ〳〵聲添へて
しらぶる不斷の莊嚴の
曲の一韻探り來て
わが人界に移し來し
偉大の靈のねむる處。

憂に沈む神女の下
見るはなんぢかモッアルト、
桂冠の天使手をあけて
なんぢにふれんとすシューベルト、
幽玄のさかひ思をやりて
かしらなゝめのブラームス、
天童天女群がりて
下より歌ふシトラウス、
綠の蔭に半身の
像はた君かあゝグルック、
像なし銘なし雪に似る
眞白き石のたゞおもて
鐫りなす瑤琴の下の名の
おほいなるかなベートーヴェン。

あゝおほいなる靈界の子等
等しくこゝにあとをとゞめて